

# 高等学校における 特別支援教育推進に関する研究

—校内研修プログラムの作成及び各校のニーズに応じた活用を通して—

## 【研究の概要】

発達障がいを含めた障がいのある子供たちが全ての学校や学級に在籍する可能性があることを前提にインクルーシブ教育システムの構築のために、特別支援教育をより推進していくことが求められている。本研究は、高等学校に焦点を当て、校内研修プログラムを作成し、各校のニーズに応じて、校内研修会における活用及び指導・支援の実践を通して、特別支援教育の推進を図ろうとするものである。

キーワード：特別支援教育推進・高等学校・校内研修プログラム・ニーズに応じた活用

## 《研究協力校》

県内公立高等学校 3校

平成 31 年 3 月  
岩手県立総合教育センター  
教育支援相談担当  
金 田 美 輝 子  
外 館 悌  
田 代 由 希  
平 浩 一

## 目 次

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	1
IV	研究の目標	2
V	研究の見通し	2
VI	研究の構想	2
1	研究についての基本的な考え方	2
(1)	高等学校の特別支援教育における動向	2
(2)	高等学校における特別支援教育の現状と課題	3
(3)	高等学校における特別支援教育の研究及び実践	4
(4)	「特別支援教育の充実」のとらえ	5
2	研究の意義	6
(1)	各校のニーズに応じることの必要性	6
(2)	校内研修の意義	6
3	研究の手立て	7
(1)	校内研修プログラムの作成	7
(2)	研究協力校各校のニーズの把握	7
(3)	研究協力校における研修プログラムの活用および指導・支援の実践	7
4	検証計画	8
(1)	校内研修プログラムの有効性	8
(2)	校内研修プログラムを活用した研修会と指導・実践を組み合わせた取組の有効性	8
5	研究構想図	9
VII	実践・結果の分析と考察	10
1	実践日程	10
2	実践構想	10
(1)	校内研修プログラムの作成	10
(2)	研究協力校のニーズの把握	13
(3)	研究協力校における研修プログラムの活用および指導・支援の実践	14
3	研究協力校における実践・結果の分析	14
(1)	ニーズの把握	14
(2)	A校の実践・結果の分析	18
(3)	B校の実践・結果の分析	26
(4)	C校の実践・結果の分析	36
(5)	実践前後の結果の分析	46
4	考察	50
VIII	研究のまとめ	53
1	全体考察	53
(1)	教員の目指す姿への変容について	53
(2)	研究の手立ての有効性について	54
2	研究の成果	54
3	今後の課題	55
(1)	教員が指導・支援の効果を実感するための工夫	55
(2)	特別支援教育コーディネーターが研修会を進めやすくするための工夫	55
IX	引用文献	56

## I 研究主題

高等学校における特別支援教育推進に関する研究  
一校内研修プログラムの作成及び各校のニーズに応じた活用を通して—

## II 主題設定の理由

平成 28 年 12 月に示された「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において、「全ての学校や学級に，発達障害を含めた障害のある子供たちが在籍する可能性があることを前提に，子供たち一人一人の障害の状況や発達の段階に応じて，その力を伸ばしていくことが課題となっている」ことを踏まえ，インクルーシブ教育システムの構築を目指す特別支援教育をより充実させていくことの必要性が述べられている。インクルーシブ教育システムの構築のためには，「すべての教員が特別支援教育に関する基礎的な知識及び技能を有すること」が求められ，「体系的な知識を身に付けるためには研修と実践を組み合わせることが必要」（文部科学省，2012）と示されていることから，特別支援教育の専門性を持った教職員が少ない高等学校においては，研修と実践を組み合わせることで特別支援教育の知識や技能を身に付けていくことが必要となる。

高等学校においては，課程や学科により教育課程が異なり，選抜試験により入学者の決定が行われていることから学校により生徒の実態が異なることや，特別支援教育の概念が浸透しにくく，インクルーシブ教育システムの理念が十分に把握されていない実態があるものと考えられる。本県の高等学校における特別支援教育の体制整備状況をみると，「校内委員会の設置」及び「特別支援教育コーディネーターの指名」とともに 100%となっており（文部科学省，2017），全ての高等学校で体制が整備されつつあると言える。しかし，本県における平成 29 年度高等学校特別支援教育コーディネーター研修講座における事前調査で，課題となっていることについて，「組織的な対応・校内支援体制」に関わる内容を挙げた学校が 48.7%，「実態把握」に関わる内容を挙げた学校が 40.8%を占めており，特別支援教育を推進するに当たってシステムをいかに機能させるかということに課題があることが明らかとなった。高等学校は，教科や学科単位の考え方が中心の教育課程が組まれており，全教職員が共通理解を図る体制が整っていないことや，生徒の実態把握の難しさ等から何をどのように進めていけばよいか明確になっていないことが要因として考えられる。

このような課題を解決するためには校内研修の活用が有効であると考えられる。校内研修には「授業力・指導力の向上」「協働の促進」「学校組織力の向上」などが期待されている（青森県総合学校教育センター，2016）。高等学校は，課程や学科によって生徒の状況や校内体制が各校で異なるものであるため，各校のニーズに応じた研修を行うことが必要である。ニーズに応じた研修と実践を積み重ねることによって，特別支援教育の専門性も向上し，教職員の協働の意識が高まり，組織的な対応につながっていくと思われる。

そこで本研究は，各校の特別支援教育推進に役立つ校内研修プログラムを作成し，各校のニーズを基に校内研修で活用し，生徒への指導・支援を実践することによって，高等学校における特別支援教育の推進を図ることを目的とする。

## III 研究の目的

特別支援教育に関する校内研修プログラムを作成し，学校が各校のニーズに応じて活用することを通して，校内における特別支援教育の理解啓発，指導・支援の実践の改善を図ることにより，高等学校の特別支援教育の充実に資する。

#### IV 研究の目標

高等学校における特別支援教育の推進のために必要な校内研修プログラムを作成し、それを活用した研修及び生徒への指導・支援の実践を通して、校内における特別支援教育の推進の在り方を明らかにする。

#### V 研究の見通し

高等学校の特別支援教育の現状や課題を先行研究によって明らかにし、推進のために必要な校内研修プログラムを作成する。研究協力校のニーズについて、教員への質問紙調査および特別支援教育コーディネーターへのインタビューをもとに把握し、各校のニーズに応じた研修プログラムを選択・活用した研修及び実践を行い、必要に応じてプログラムを修正し、冊子にまとめる。研修及び実践前後の教員への質問紙調査により、研修の効果を検証する。

#### VI 研究の構想

##### 1 研究についての基本的な考え方

###### (1) 高等学校の特別支援教育に関する動向

平成 18 年に学校教育法が改正され、幼稚園から高等学校までの全ての学校において、教育上特別な支援を必要とする幼児児童生徒に対し、障がいによる学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うことが明記された。高等学校においては、生徒指導や教育相談等の観点から指導・支援は行われてきているものの、一人一人の教育的ニーズを把握し、それに応じた指導・支援を行うという特別支援教育の理念の実現という観点からは多くの課題が残されていた。この状況を踏まえ、特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議の下におかれた「高等学校ワーキンググループ」において、高等学校における特別支援教育の推進体制、高等学校における発達障がいのある生徒への教育支援等の課題について検討された（調査協力者会議，2009）。この中で、教職員の理解向上や生徒の特性に応じた指導を行うなどの体制・指導の充実を図るとともに、入試における配慮・支援、社会生活や就労への適応力向上のための指導・支援の充実などが示された。また、高等学校における「発達障害支援モデル事業」が進められ、教員の意識改革や専門性の向上、対象となる生徒以外の生徒への成果などのほか、実態把握の方法や授業改善・指導の工夫など、複数の指定校における実践の成果や課題が示されている。

以後、高等学校における特別支援教育推進のための体制は、小・中学校から遅れながらも、校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名などの整備が進められ、平成 30 年度の通級による指導の制度運用となった。この間、「障害者基本法」の改正に伴う就学先決定に関する「学校教育法施行令」の改正により、障がいのある児童生徒の入学先は、児童生徒の状態を踏まえた検討を行った上で判断・決定することとなり、特別支援学校だけでなく、通常の学級に在籍することも可能となっている。

こうした中、「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申，2016）」では、特別支援教育の課題及び必要性などについて次のように述べている。

- 特別支援教育の対象となる子供たちは増加傾向にあり、通常の学級において、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面での著しい困難を示す児童生徒が 6.5 %程度在籍しているという調査結果もある。全ての学校や学級に、発達障害を含めた障害のある子供たちが在籍する可能性があることを前提に、子供たち一人一人の障害の状況や発達の段階に応じて、その力を伸ばしていくことが課題となっている。 「答申」 p. 8

- 障害者の権利に関する条約に掲げられたインクルーシブ教育システムの構築を目指し、子供たちの自立と社会参加を一層推進していくためには、通常学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校において、子供たちの十分な学びを確保し、一人一人の子供の障害の状態や発達の段階に応じた指導や支援を一層充実させていく必要がある。「答申」 p. 58
- その際、小・中学校と特別支援学校との間での柔軟な転学や、中学校から特別支援学校高等部への進学などの可能性も含め、教育課程の連続性を十分に考慮し、子供の障害の状態や発達の段階に応じた組織的・継続的な指導や支援を可能としていくことが必要である。「答申」 p. 58

高等学校においても、インクルーシブ教育システム構築を目指し、一人一人の子供の状態に応じた、組織的・継続的な指導・支援が求められており、そのための教職員の意識や専門性の向上、組織的な支援体制づくりが早急に求められていると言える。

## (2) 高等学校における特別支援教育の現状と課題

高等学校は、入学のための選抜制度があるため、特別支援教育の概念が浸透しにくい状況にあることが考えられる。その一方で、特別な支援を必要とする生徒の割合も増えている状況にあることから、特別支援教育の必要性を感じている教員も少なからずいることが予想される。このようなことから、特別支援教育の土壌が十分ではないところで、教師の意識改革や特別な支援を必要とする生徒への支援をどのように進めていけばよいか課題となっていることが考えられる。

### ア 教員への意識調査から

高等学校の特別支援教育の現状について、国立特別支援教育総合研究所（2012）により、教員への意識調査から次のことが明らかになっている。高等学校における特別支援教育の必要性については、「とても必要」「必要」が合わせて 77.4%であるのに対し、高等学校で特別支援教育はできるかについては、「できる」「工夫すればできる」が合わせて 47%、「現状では難しい」が 40.2%であった。現状では難しい又はできない理由については「指導・支援する人がいない」「忙しくて余裕がない」「話し合い、情報交換する時間がとれない」の順に多かった。また、姫野・関・安達・近藤（2017）の調査によると、特別支援教育について学ぶ必要性についてはほとんどの教員が「とても思う（71.2%）」「やや思う（26.5%）」と考えていること、学びたい内容については「困難場面における具体的な手立て」が 80.5%と高く、「各障害に関する知識や理解（73.8%）」や「校内や校外の連携・調整の方法（50.7%）」を上回っており、実践場面における「指導・支援」を学ぶことへのニーズが高いことが示されている。特別支援教育を進めていくに当たって、指導・支援における教員の専門性をどのように高め、共通理解を図るための時間や場をいかに確保していくかが課題と言える。

### イ 生徒の実態の多様性から

高等学校は、全日制、定時制、通信制の課程に分かれており、また、普通科、専門学科、総合学科の学科に分かれている。普通科は進学を意識した教育課程を編成している学校が多く、専門学科は専門的な内容の教育課程を、総合学科は職業選択に必要な能力・態度の育成を行う等、特色ある活動が行われる教育課程を編成している。生徒は自分で学校を選択することができ、選抜制度により学校が決定されるが、不本意入学の問題等の課題も指摘されている（初等中等教育分科会 高等学校教育部会，2016）。また、文部科学省の調査により、発達障がい等困難のある生徒の割合は全日制で 1.8%であるのに対し、定時制で 14.7%、通信制で 15.7%を占めていることが明らかになっている。教員への意識調査からも進学者の多い全日制では気になる生徒の割合は少なく、定時制で多いという結果が得られているほか、全日制と定時制・通信制の違いや、進学者と就職者の多さの違いを見るための分類により、それぞれの特徴や傾向を整理した研究もある（国立特別支援教育総合研究所，2014）。国立特別支援教育総合研究所（2014）から示された分類における各

群の内容は以下のとおりである。

I群…（課程別）全日制	（タイプ別）大学進学者が多い
II群…（課程別）全日制	（タイプ別）大学進学者と就職者が混在している
III群…（課程別）定時制・通信制	（タイプ別）指定なし

学科や課程，大学進学者及び就職者の多さによって在籍する生徒の実態は異なっており，各校のニーズに合わせた指導・支援が必要と考えられる。

#### ウ 校内研修の視点から

高等学校における特別支援教育の校内研修の現状として，岡山県総合教育センター（2013）の報告から次のことが明らかになっている。特別支援教育に関する研修会の頻度については，全体として「年に1回」の学校が最も割合が多く，I群（全日制課程 普通科学科 33校）では，「1回も行わない」という学校が9%あった。また，研修への教職員の参加状況については，I群とII群（全日制課程 職業系学科・総合学科 24校）合わせて半数以上が3分の2以下であった。これらの結果から，全教職員で校内研修を実施するという意識は，年間計画に校内研修が位置付けられている小・中学校と比較して低いと言える。

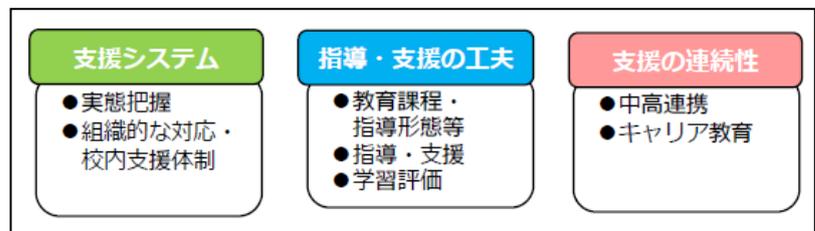
#### エ 県内の状況から

県内の特別支援教育の体制整備状況は，「校内委員会の設置」「特別支援教育コーディネーターの指名」とも100%に達しており（文部科学省，2017），体制は整いつつある。しかしその一方で，平成29年度高等学校特別支援教育コーディネーター研修講座（岩手県教育委員会，2017）の事前調査において，課題となっていることについて「組織的な対応・校内支援体制」にかかわる内容を挙げた学校が48.7%，「実態把握」に関わる内容を挙げた学校が40.8%を占めている。課程別に見ると，全日制の普通科，専門学科ともに全体と同じ傾向が見られるが，定時制・通信制課程においては，割合が高い順に，「キャリア教育（54.5%）」「指導・支援（36.4%）」が挙げられており，全日制課程とは異なる内容の割合が高くなっている。課程によって異なるものの，特別支援教育の推進役である特別支援教育コーディネーターの視点からは，全体の傾向として「組織的な対応や校内体制づくり」「実態把握」に関わることに課題があると捉えられている。

### (3) 高等学校における特別支援教育の研究および実践

国立特別支援教育総合研究所（2012，2014）の研究では，発達障がいのある子供へのライフステージに応じた支援を踏まえた上で，高等学校における特別な支援を必要とする生徒への指導・支援について，文部科学省発達障害支援モデル指定校のうち15校の実践をもとに7つの観点（「実態把握」「組織的な対応・校内支援体制」「教育課程・指導形態」「指導・支援」「学習評価」「中高連携」「キャリア教育・進路指導」）

から示されている。これら7つの観点は，【図1】に示すように，実態把握や校内支援体制を含む「支援システム」と，教育課程や学習評価等の「指導・支援の工夫」，中高連携やキャリア教育等の「支援の連続性」の



【図1】7つの観点と3つの枠組みとの関係

3つの枠組みから検討されているものである。本研究においては，県内の高等学校の特別支援教育コーディネーターが「実態把握」と「組織的な対応・校内支援体制」に課題があると捉えていること，そして，高等学校の教員への意識調査から実践場面における対応としての「指導・支援」に対するニ

ーズが高いことから、「実態把握」「組織的な対応・校内支援体制」「指導・支援」の3観点に絞って進めていくこととする。「実態把握」の観点からは「教職員間の共通理解が大切であること」、「組織的な対応・校内支援体制」の観点からは「校内に組織として対応できる体制を整備すること」「日常的に教員同士で話題にできる校内の雰囲気、人間関係を構築しておくことが重要であること」、「指導・支援」の観点からは「授業全体における配慮や工夫」「個に応じた配慮や工夫」「情緒の安定など心の育ちに関する支援」等が重要であることが具体的に示されている（国立特別支援教育総合研究所，2014）。これまで具体的な実践の少ない高等学校の特別支援教育の推進において必要なものであるが、それをどのように教員に理解を図り、生徒への指導・支援につなげていくかが課題と言える。

また、北海道教育委員会（2015）から試案として提案されている「校内研修プログラム」には、発達障がいのある子供の指導や支援に関する基礎的な知識や技能を取得するため研修内容及びシート、研修形態等が示されている。これは、特別支援教育の指導・支援だけでなく体制づくりも意図した、各校の実態に応じて活用が可能なものであり、様々な活用が考えられるところがよさと言えるが、活用のしかたに難しさを感じる可能性も考えられるため、より具体的な活用方法を示すことで研修に取り組みやすくなると思われる。

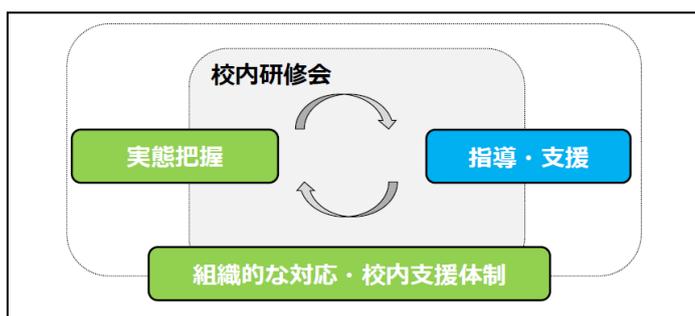
なお、北海道教育委員会（2015）では、実践事例集として各校種の実践例を別冊に示すことで活用の工夫が図られている。このように、専門性が高いとは言えない高等学校の特別支援教育コーディネーターにも抵抗なく使えるような工夫がさらに必要であると考えられる。

#### (4) 「特別支援教育の充実」のとらえ

研究を進めていくに当たり、高等学校における「特別支援教育の充実」については、特別支援教育の理念の実現を目指し、次のように捉える。

生徒の自立や社会参加に向けて、生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うことを、全教員で取り組んでいる状態

「特別支援教育の充実」について、前述した3つの観点との関連から次のように整理することができる。生徒一人一人の教育的ニーズを把握するためには「実態把握」の観点が必要であり、適切な指導及び必要な支援を行うためには「指導・支援」の観点が必要である。そして、全教員で取り組むためには「組織的な対応・校内支援体制」の観点が必要となる。したがって、これら3つの観点「実態把握」「指導・支援」「組織的な対応・校内支援体制」（【図2】）から、本研究における教員の目指す姿を次のように捉えることとする。



【図2】 3つの観点の関係図

- ①教員が生徒の困難さに気付くことができている 【実態把握】
- ②教員が生徒の困難さに合わせた指導・支援を実践している 【指導・支援】
- ③校内で生徒の困難さや指導・支援の共通理解を図り、役割分担ができている 【組織的な対応・校内支援体制】

このような教員の姿を目指して、特別支援教育を推進していくために必要な校内研修プログラム

を作成し、それを活用した研修及び生徒への指導・支援の実践を通して、高等学校の校内における特別支援教育の推進の在り方を明らかにしていくことが本研究の目標である。

## 2 研究の意義

### (1) 各校のニーズに応じることの必要性

国立特別支援教育総合研究所（2012）の研究では、課程や学科により発達障がいの子の在籍の割合が異なっていることから、文部科学省「高等学校における発達障害支援モデル事業」研究校 15 校の実践を課程別、タイプ別の分類による 3 つの群に分け、各校の特徴や支援の傾向を整理している。著者が概要を表にまとめたものを【表 1】に示す。

**【表 1】 課程別、タイプ別の特徴や傾向（国立特別支援教育総合研究所（2012）の概要を著者がまとめたもの）**

I 群 全日制，大学進学者多い	II 群 全日制，大学進学者と就職者混在	III 群 定時制・通信制，就職者多い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障がいの生徒の割合は低い</li> <li>・学力面も問題になっていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障がいの生徒がどの学校にも在籍している</li> <li>・不登校経験あり，学力不足の生徒が在籍している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障がいの生徒や不登校経験のある生徒が非常に多い</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察や欠席状況による実態把握が中心</li> <li>・わかる授業を心がけている</li> <li>・個別の支援が中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チェックリストによる実態把握が中心，複数の方法で多面的に把握</li> <li>・生徒の特性や課題に合わせたわかる授業の観点で授業に視点をあてた取組が中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校や保護者との連携に積極的</li> <li>・総合的な実態把握と教職員間の情報共有</li> <li>・生徒の特性や課題に合わせたわかる授業の観点で組織的な授業改善</li> </ul>

各課程、学科に在籍する困難さのある生徒の割合が、指導・支援をする上で教員が感じる困り感に影響を与え、特別支援教育の必要性や意識に影響することが考えられる。さらに、発達障がいの生徒は環境に適應することに困難さがあるため、課程や学科、求められる能力等、各校の環境の違いによって、教育的ニーズが異なる可能性が考えられる。困難さを抱える生徒一人一人の教育的ニーズは異なるものであり、それらを把握して対応できるようにしていくためには、各校の教員が感じる困り感に合わせた研修を行い、実践に結び付け、指導・支援の効果を実感していくことが必要である。各校の教員のニーズとともに、特別支援教育コーディネーターのニーズも把握した上で、学校のニーズを整理し、研修内容を検討していくことが、各校の特別支援教育の推進につながると考える。

### (2) 校内研修の意義

校内研修は、専門的な知識や技能を高める場であるとともに、全体で共通理解を図ることが可能な場であり、同僚性を構築する場でもある。小・中学校においては、年間計画に位置付けられ、ユニバーサルデザインの授業づくりの研究会を行っている学校のほか、生徒理解のための事例研究会を実施する学校も増えており、全員参加の研修会が定期的に行われている。また、校内研修の改善が進んでいる学校の教員の意識は、一般の学校教員の意識と比較すると、「協議の時間が設定され」「全体研修だけでなく少人数による協議の場」があり、「自分の意見が自由に言える雰囲気である」などの研修の進め方に関する意識が高く、「協議による共通理解が得られた」という意識や、「話し合ったことが全体に反映されている」「他人の意見に啓発された」など実践への意欲も高いことが、全校種の教員を対象とした調査により報告されている（静岡県総合教育センター，2007）。

県内の高等学校における校内研修はこれまで、外部講師を招いての講義形式のものが多く、自校の教員のみで実施することや研究会・検討会などの協議形式のものは多くは実施されていない。しかし、専門家を招いての事例検討会において、コンサルテーションを実施した結果、教員の指導が変化した実践例も示されている（式部・岩坂・井上，2015）。専門家を活用する視点とともに、教員同士の困り感を共有し具体的な指導・支援を検討する視点を加えることで、組織的な対応が可能となり、組織的な支援体制が構築されていくと考える。また、各教員の経験や専門性を生かせる検討会・研究会の形式を示すことで、外部講師に頼らない校内研修も可能となり、特別支援教育コーディネーターが研修会を実施する見通しが立てやすくなると考える。そのため、特別支援教育コーディネーターが、各校の実態に応じて活用が可能で、高い専門性がなくても取り組める、自校での研修が可能なプログラムを作成する。このことにより、生徒への指導・支援にも生かすことができ、高等学校において課題とされている特別支援教育の理解が図られるとともに、全教員で研修する意識が高まり、特別支援教育の推進につながっていくものと考えられる。

### 3 研究の手立て

高等学校の特別支援教育の現状と課題から、各教員の特別支援教育に対する理解が十分ではないこと、各校の実態に合わせた指導・支援が必要であること、全員で研修する意識が低いこと、「組織的な対応・校内支援体制」や「実態把握」に課題があることが明らかとなった。これらの課題を踏まえ、手立てを次の3点にして研究を進めていく。

#### (1) 校内研修プログラムの作成

各教員の特別支援教育に対する理解が十分ではないことを踏まえた上で、各校の実態に合わせて活用できるもので、組織的な対応ができるようにするため、校内研修プログラムの作成に当たっては下記の点に留意する。

- ・専門性がなくても取り組みやすいものであること
- ・実際に体験しながら学べる内容であること
- ・少人数による協議の場が設定されるものであること
- ・自校で研修ができるものにする
- ・組み合わせが可能で、各校の実態に合わせて様々な活用ができるものにする

#### (2) 研究協力校各校のニーズの把握

各校の実態に合った研修にするため、各校の教員と特別支援教育コーディネーターに下記の調査を実施し、各校のニーズを把握する。

ア 研究協力校各校のニーズの把握のための教員への質問紙調査

イ 研究協力校各校のニーズの把握のための特別支援教育コーディネーターへのインタビュー調査

#### (3) 研究協力校における研修プログラムの活用および指導・支援の実践

研修プログラムの活用に当たっては、研究協力校のニーズを基に研修内容を検討し、全教職員で研修する場を設定する。活用および指導・支援の実践は下記の流れで進めていく。

ア 校内研修会の計画立案（特別支援教育コーディネーター，担当者）

イ 校内研修会の実施

ウ 校内研修会の振り返り（特別支援教育コーディネーター，担当者）

エ 指導・支援の実践

オ 研究協力校からの実践の記録（映像，写真，指導案，授業記録，支援経過など）の回収

カ 校内研修および実践の振り返り（特別支援教育コーディネーター，担当者）

#### 4 検証計画

研究の検証については、下記の項目について実施し、それぞれの有効性について検証する。

- (1) 研修プログラムの有効性
  - ア 校内研修会実施前後の教員の意識の変化（質問紙調査）
  - イ 校内研修会実施後の特別支援教育コーディネーターの意識（質問紙調査）
- (2) 研修プログラムを活用した研修会と指導・支援の実践を組み合わせた取組の有効性
  - ア 校内研修会及び実践前後の教員の意識および行動の変容（質問紙調査）
  - イ 校内研修会及び実践実施後の特別支援教育コーディネーターの意識（質問紙調査）



【図3】研究構想図

## Ⅶ 実践・結果の分析と考察

### 1 実践日程

実践については、下記の流れで進めた。

4月～	校内研修プログラムの作成開始
5月	研究協力校の教員対象の質問紙調査（事前調査） 特別支援教育コーディネーターへのインタビュー調査
7～8月	校内研修会の立案
9～11月	校内研修会および指導・支援の実施
11月	研究協力校各校への教員対象の質問紙調査（事後調査） 特別支援教育コーディネーターへの質問紙調査（事後調査）

### 2 実践構想

#### (1) 校内研修プログラムの作成

##### ア 先行研究の調査

校内研修プログラムの作成に当たっては、県内の多くの高等学校が課題として捉えている「組織的な対応・校内支援体制」と「実態把握」を改善できるような内容が必要である。そこで、国立特別支援教育総合研究所（2014）から示されている「実態把握」「組織的な対応・校内支援体制」「指導・支援」の3観点における指導・支援のポイントを参考に先行研究を調査した。

北海道教育委員会（2015）が提案している「校内研修プログラム」は、幼稚園から高等学校までの全ての校種を対象としたプログラムであり、特別支援教育の指導・支援だけでなく体制づくりも意図した、各校の実態に応じて活用が可能なものである。また、岡山県総合教育センター（2015）は、高等学校の特別支援教育の現状と課題を明確にした上で、「特別な支援が必要な生徒の理解の一層の促進」「個別の教育支援計画の作成と活用」「各学校の実情に応じた機能的な校内支援体制づくり」等の内容をハンドブックにまとめ、生徒の実態に応じた適切な指導・支援を行っていくことを目指している。授業づくりについては、佐賀県教育センター（2016）が、ユニバーサルデザインの授業について、リーフレットとしてコンパクトに整理した上で、具体的な事例を写真等で示しながら、どのように授業づくりを進めていけばよいかを分かりやすくまとめている。

さらに、「実態把握」に当たっては、高校生の状態に合わせた生徒の困難さや得意な部分を明確にできるようなチェックリストが必要と考え、「切れ目のないキャリア教育のための評価尺度（Scale for Coordinate Contiguous Career; Scale C<sup>3</sup>）」（韓・沼館・呉屋・照屋，2018；以下「Scale C<sup>3</sup>」とする）を採用することとした。本尺度は、「高校生から社会人を対象としたキャリア形成のための評価と継続的支援を行うためのツールとして開発された」尺度であり、発達的な課題を含む「パーソナリティ」領域と、高等学校キャリア教育の手引きに示されている「基礎的・汎用的能力」の各能力の具体的な要素を参考に設定されている「キャリア」領域の2つの領域からなる尺度である（韓ら，2018，【図4】）。実践時は試案が開発され、その尺度の信頼性検証の段階であったため、本研究においては、試案<第2版>【図4】と<第3版>【図5】の2つを活用することとなった。現在、Scale C<sup>3</sup><第3版>は沖縄県内高等学校316名のデータにより尺度としての信頼性が検証されている（Shimojo, Teruya&Kohara, 2019）。

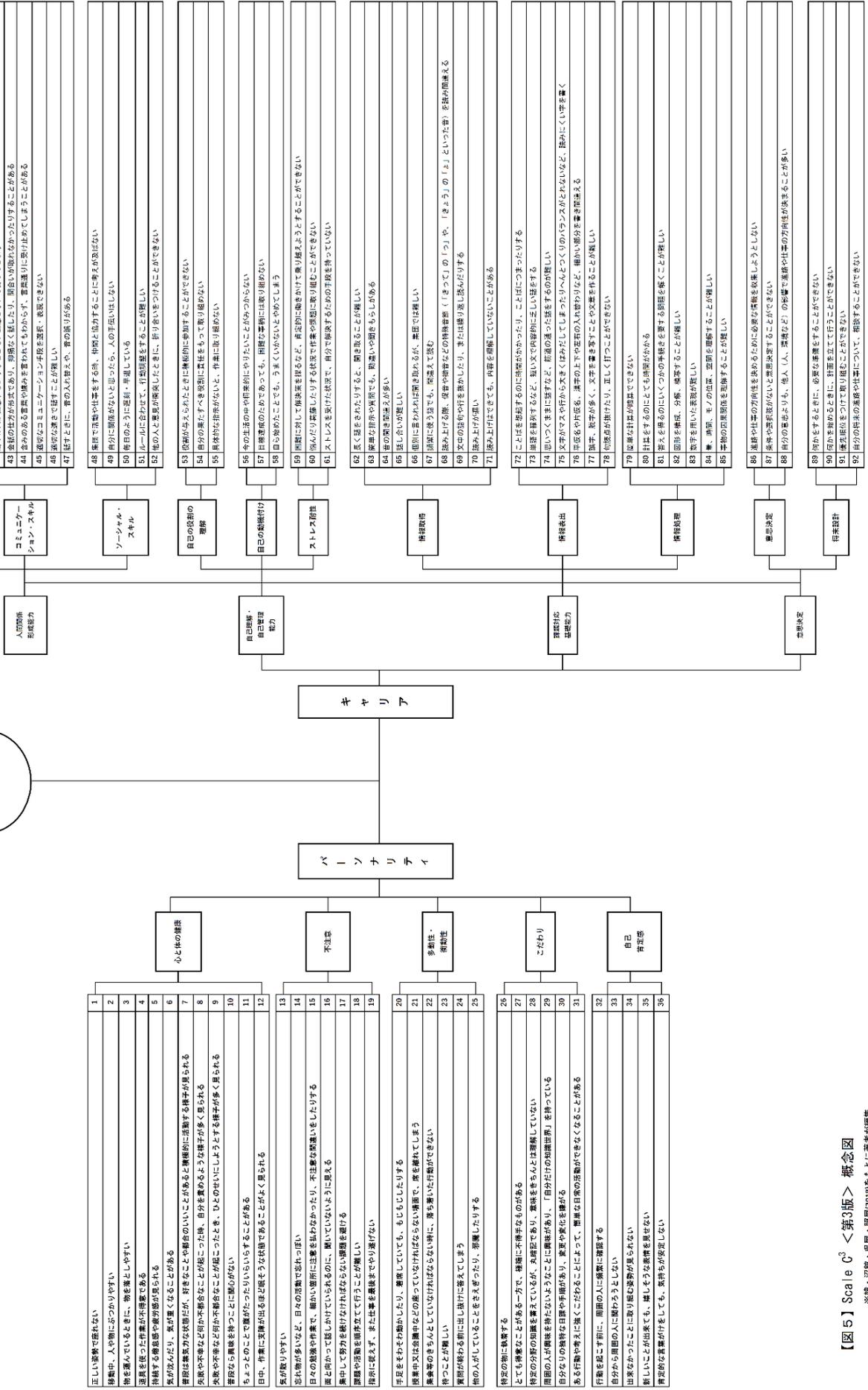
##### イ プログラムの内容の検討

プログラムの内容については、協議の場で共通理解を図りながら校内体制づくりを進め、特別支援教育の理解が深められていく構成となっている北海道教育委員会（2015）の「校内研修



< 第3版 >

Scale C3



【図5】 Scale C3 <第3版> 概念図

※横・沼田・奥屋・照屋(2018)をもとに著者が編集

プログラム」を基本として、特別支援教育の知識に関する内容と、授業づくりの進め方の内容が必要と考え、これまでの岩手県立総合教育センターの研究資料を基に、組み合わせて構成することとした。専門性がなくても取り組みやすく、自校で研修できるものであり、組み合わせが可能で各校の実態に合わせて様々な活用ができるものとするため、特別支援教育に関する基本的理解に関わる「解説編」と、演習を基に理解を深めたり共通理解を図ったりするための「演習編」で構成し、演習編には、研修者が使う演習シートと、研修会を進めるために特別支援教育コーディネーターが使う活用シートを作成した。

(2) 研究協力校のニーズの把握

実践に当たり、課程や学校規模の異なる県内公立高等学校3校の協力を得ることとし、各校のニーズを把握するため、次の2種類の調査を行うこととした。各校の概要については、【表2】に示す。

【表2】研究協力校各校の概要

	A校	B校	C校
課程・学科	全日制・普通科／専門学科	全日制 普通科	定時制 普通科
学級数	12学級	6学級	3学級
教職員数	約50名	約25名	約10名
進学と就職の比率	進学：就職 = 2：1	進学：就職 = 1：1	進学：就職 = 1：3

ア 各教員を対象とした質問紙調査

調査用紙は国立特別支援教育総合研究所（2012）を基に、高橋（2007）も参考にしながら作成した。以下の13の質問について項目ごとに4件法で尋ねた。

Q1	気になる生徒についての相談の有無
Q2	支援が必要な生徒に対する支援の取組の有無
Q3	専門家等への相談の有無
Q4	特別支援教育を全職員で取り組む必要性
Q5	高等学校における特別支援教育の必要性
Q6	高等学校における特別支援教育の可否
Q7	高等学校における特別支援教育が「現状では難しい」「できない」理由
Q8	特別支援教育を進めていくために必要な支援体制
Q9	学習面で特別支援教育が必要と思われる生徒の割合
Q10	行動面で特別支援教育が必要と思われる生徒の割合
Q11	授業中の工夫（24項目）の実施状況
Q12	支援の必要な生徒への対応（10項目）の状況
Q13	今後学びたい内容と程度（14項目）

（国立特別支援教育総合研究所（2012）、高橋（2007）より引用、一部改編）

イ 特別支援教育コーディネーターを対象としたインタビュー調査（一部質問紙調査）

各校の特別支援教育コーディネーターに、以下7項目についてインタビュー調査を行うこととし、インタビューの時間がとれない場合には質問紙に記入する形をとった。

Q1	特別支援教育を進めていくに当たって、今学校に必要なこと
Q2	教職員に必要な研修内容
Q3	昨年度の校内研修の回数と内容

- Q 4 Q 3の成果や課題
- Q 5 特別支援教育コーディネーターとして困っていること
- Q 6 連携したことのある外部機関や専門家の機関名と内容
- Q 7 特別支援教育推進に必要なこと（選択肢に優先順位を付ける）

(3) 研究協力校における研修プログラムの活用および指導・支援の実践

各校のニーズを基に、活用するプログラムを決定し、9～11月までの期間に月1回を目安として、各校の実情に合わせて校内研修会を計画することとした。研修会は各校の特別支援教育コーディネーターが中心となって行うが、必要に応じて当センターの担当者も加わり、状況に合わせて進めることとした。

3 研究協力校における実践・結果の分析

(1) ニーズの把握

前述した各教員への質問紙調査と特別支援教育コーディネーターへのインタビュー

(一部質問紙調査)から各校のニーズを整理してまとめた。

まず、各校における特別な支援が必要と思われる生徒の割合について、学習面と行動面に分けて尋ねた結果が右の【図6】【図7】である。

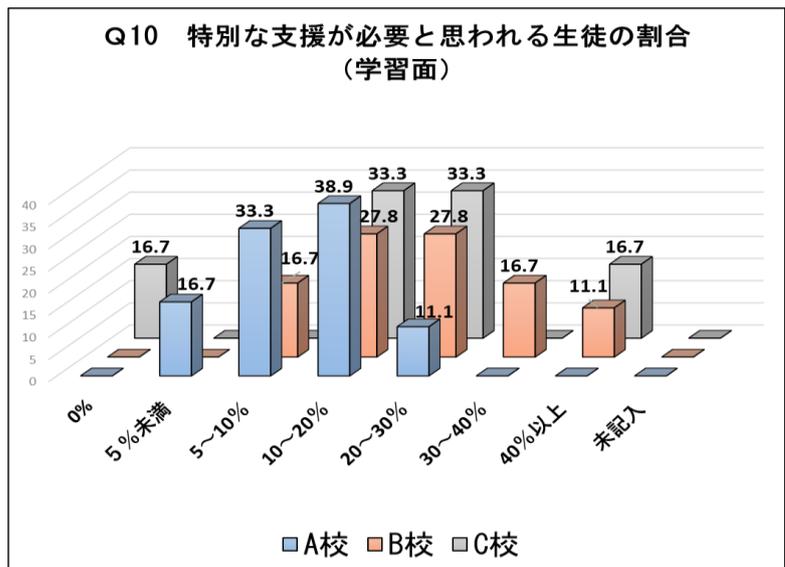
A校とB校はともに全日制の普通科を有する学校であり、国立特別支援教育総合研究所

(2012)により示された分類のⅡ群に該当するが、学習面・行動面両面で、特別な支援が必要と思われる生徒の割合の捉え方が異なることが明らかとなった。また、学習面においてB校は、定時制であるC校と同様の傾向があることが読み取れた。質問紙調査とインタビューの概要を次頁の【表3】【表4】に示す。

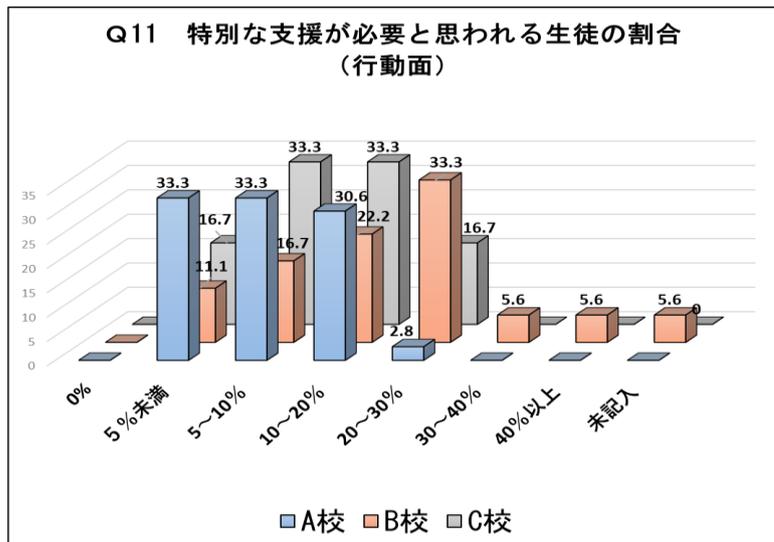
これら各校のニーズを基に特別支援教育コーディネーターと当センターの担当者が研

修内容を検討し、校内研修プログラムを選定した。校内研修計画をまとめたものが【表5】【表6】

【表7】である。研修会を他の行事等との抱き合わせで行ったり、関係する一部の教員による研修会にしたりするなど、各校の実情に合わせた研修計画として作成した。また、各校のニーズに添えない場合は、その都度プログラムを修正・追加して実施した。



【図6】学習面で特別な支援が必要と思われる生徒の割合



【図7】行動面で特別な支援が必要と思われる生徒の割合

【表3】研究協力校各教員への質問紙調査（事前）結果の概要

質問内容	A校（対象数36名）	B校（対象数18名）	C校（対象数6名）
1 特別な支援が必要と思われる生徒の割合	<学習面>「20%以上いる」が11.1% <行動面>「20%以上いる」が2.8% →支援を必要とする生徒の割合が、B校、C校と比較してそれほど多くないと捉えている。	<学習面>「20%以上いる」が54.6% <行動面>「20%以上いる」が44.5% →支援を必要とする生徒の割合が多いと捉えている。	<学習面>「20%以上いる」が50.0% <行動面>「20%以上いる」が16.7% →学習面での支援を必要とする生徒の割合が、多いと捉えている。
2 特別支援教育に対する意識	特別支援教育の必要性や、全教職員で取り組む必要性を感じているが、高等学校において特別支援教育ができるかについては「現状では難しい」と捉えている割合も3割あり、学校体制が整っていないことのほか、支援の仕方が分からないことや忙しさを理由に挙げている。	特別支援教育の必要性や、全教職員で取り組む必要性を感じている割合が高い一方で、「現状では難しい」と捉えている割合も2割ある。	特別支援教育の必要性や、全教職員で取り組む必要性を感じているが、高等学校の「現状では難しい」と捉えている教員もいる。
3 特別支援教育に必要な支援体制	「外部機関の活用」の割合が高く、専門家（機関）を活用する必要があると考えている割合が多い。「職員研修会」が必要と考えている教員の割合は4割以上を占める。	「学習指導の充実」が必要と考えている割合が5割以上である。「職員研修会」や「外部機関の活用」も4割以上を占めている。	「外部機関の活用」が8割以上を占め、専門家（機関）を活用する必要があると考えている。「職員研修会」が必要と考えている割合は6割以上を占める。
4 授業中の工夫	「～分まで」「～ページまで」等、指示を明確に出したり、板書の文字の大きさや量を工夫する、ノートを写す箇所を示したり時間を確保したりするなど、個別の配慮を意識した全体への支援が中心に行われている。	作業量や課題量を調整したり、一人一人に助言や声がけをしたりなどの個別の対応や、機器やワークシートの活用その他、生徒が理解したかを確認したり、質問できる雰囲気にするなど、生徒が理解するための指導が中心に行われている。	板書の文字の大きさや量を工夫したり、ノートを写す箇所を示す、写す時間を確保する、目標やねらいを伝えるなど、個別の配慮を意識した全体への支援が行われている。
5 支援の必要な生徒への対応	専門機関から助言を受けたり、研修会を実施している一方で、特性に応じた対応については、他の項目として比較してできていないと考えている割合が多い。	生徒と積極的にコミュニケーションをとったり、教員間の話し合いができており、協力した対応や相談できる場があると考えている一方で、特性に応じた対応ができていないと考える教員の割合が4割近くいる。	教員間の話し合いや協力した対応がなされていると一方で、特性に応じた対応や、授業中の学び方のきまりを明確にして丁寧な指導するという項目では、半数ができていないと考えている。
6 学びたい内容	①特別な支援が必要と思われる生徒に合わせた授業の進め方 ②対人関係のスキル学習 ③特別な支援が必要と思われる生徒への個別支援	①特別な支援が必要と思われる生徒に合わせた授業の進め方 ②授業研究会で生徒が分かる授業の理解を深めること ③事例検討会で支援が必要な生徒の理解を深めること	①保護者との連携 ②授業研究会で生徒が分かる授業の理解を深めること ③就労や進学を見通した支援の在り方（キャリア教育）

【表4】特別支援教育コーディネーターへのインタビュー調査結果の概要

質問内容	A校	B校	C校
1 特別支援教育を進めていくにあたって今学校に必要なこと	・特別支援教育の明確な位置づけ（組織、体制） ・定期的な支援会議の開催 ・地域との連携（医療機関、相談機関） ・管理職のリーダーシップ	・生徒理解と教員間の共通理解 ・家庭との関係性 ・管理職のリーダーシップ	・ソーシャルスクールワーカー ・電子黒板
2 教職員に必要な研修	・発達障がい知識と生徒の状況を一致させるための研修（できること、できないこと、援助等を具体的に示す） ・二次障がいについて ・特別支援教育に係る法律	・生徒の共通理解（生徒のよさの生かし方、柔軟な考え方） ・誰にでも取り組みそうな支援（授業、生活）	・授業の具体的なアイデア ・外部機関との連携のしかた
3 昨年度の校内研修会の内容	①小論文研修 ②カリキュラムマネジメント ③いじめに関する研修	①SST研修（職員対象） ②SST講座（生徒対象） ③発達障がいのある子供への関わり方	①広汎性発達障害の基本、学習障がい、ADHDの概要、進路を見据えた高等学校での対応 ②スクールソーシャルワーカーとの連携 ③心とからだの健康観察の活用、発達段階に応じた生徒理解、カウンセリング理論
4 困っていること	・他業務との重なりによりコーディネーター業務に集中できない ・発達障がいだけでなく、愛着障がい等に必要とされる専門性の高い対応を、教科指導重視の教師にどう伝えていくか ・地域の状況から外部機関とつながりにくい	・個別指導内容でのマッチングの難しさが「生徒ができない」と感じることにつながる。職員の困り感や負担感にどう答えるか ・特別支援教育コーディネーターの業務内容が複雑で、引継ぎが難しいと感じること	特になし
5 特別支援教育推進に必要なこと（優先順位）	①校内での情報共有 ②校長のリーダーシップ ③外部機関との連携	①校内での情報共有 ②特別支援教育に対する知識と理解 ③外部機関との連携	①校内での情報共有 ②保護者との連携 ③教員に対する支援

【表5】 A校のニーズ及び研修内容の決定理由

現状とニーズ	<p>A校は、特別な支援を必要と思われる生徒は在籍しているが、割合としてはそれほど多くないと捉えている傾向がある。特別支援教育の必要性や全職員で取り組む必要性を感じているものの約3割が高等学校で特別支援教育を行うことが「現状では難しい」と考えている。授業では、指示の出し方や板書の仕方等に工夫が見られ、全体への支援が中心に行われている。</p> <p>学びたい内容としては、授業の進め方、対人関係スキル学習、個別の支援が挙げられている。特別支援教育コーディネーターは、特別支援教育を進めていくに当たって「組織及び体制づくり」が必要と考えており、「医療機関との連携」や「支援会議の定期開催」等を視野に入れている。教員に対しては、発達障がい知識を実際の支援に生かすために、知識と実践をつなぐ研修が必要と考えている。</p>		
決定理由	<p>A校のニーズからは、授業の進め方を学びたいという意識が高い一方で、すでに全体に対する支援として取り組んでいる内容も多いことが分かった。また、学校規模が比較的大きいため様々な行事等が重なって全体での研修会の開催が難しい状況にある。</p> <p>そこで、個別の事例を取り上げ、小規模な研修会を実施することが、より状況の見立てと具体的支援を考える有益な機会となると考えた。そのため、特別支援教育コーディネーターが必要と考えている「知識と実践をつなぐ研修である」ことや、「支援会議の定期開催」を目的として事例検討会を継続して開催することを意図し、下記の研修会を計画した。</p>		
研修会	校内研修会①	6/12	支援を必要とする生徒の理解と支援〈研修指導主事講義〉 【90分】
	学年研修会②	9/19	事例検討会（指導・支援） 【40分】
	学年研修会③	11/15	個別の指導計画の活用 【30分】

【表6】 B校のニーズ及び研修内容の決定理由

現状とニーズ	<p>B校は、学習面・行動面ともに特別な支援を必要とする生徒の割合が多いと捉えられており、特別支援教育や全教員で取り組む必要性を感じている割合が高い。特別支援教育に必要な支援体制は学習指導の充実と考えている教師の割合が高く、授業ではわかる授業づくりを意識しながら一人一人に応じた課題量の調整や声かけなど個別の対応を行っている一方で、生徒の特性に応じた対応ができていないと考える教師も4割近くいる。</p> <p>昨年度はソーシャルスキルトレーニングの研修を実施し、特別支援教育に関する研修を継続して行っている。特別支援教育コーディネーターは、生徒理解を深めながらそれをもとにした支援を考える力をつけるための研修が必要と考えている。</p>		
決定理由	<p>学習面・行動面ともに支援を必要とする生徒の割合が多く、日常的に教師の困り感が高いことが予想された。毎年、特別支援教育に関する研修会は継続されてきており、教員の特別支援教育に対する意識は高くニーズもあると考え、授業づくりと事例検討の2本立てで研修を進めることとした。</p> <p>事例検討会については、特別支援教育コーディネーターが必要と考えている「生徒理解を深めながら、それを基にした支援を考える力」に結び付けることができるよう、特別支援教育で用いられることの多い「機能分析」を学び、支援の幅を広げられるようにしようと考えた。また、授業づくりについては、秋に地域連携に関わる授業参観が予定されており、具体的な指導の方法を示して欲しいという特別支援教育コーディネーターからの要望もあったため、モデル授業を観た上で協議につなげる内容で研修を進めることとした。</p>		
研修会	校内研修会①	9/7	事例検討会（見立て、指導・支援） 【90分】
	校内研修会②	10/4	授業づくり（指導・支援） 【60分】
	校内研修会③	10/24	事前研究会 【60分】
	校内研修会④	11/12	事後研究会 【60分】

【表7】C校のニーズ及び研修内容の決定理由

<p>現状とニーズ</p>	<p>C校（定時制）は、在籍生徒数、教員数ともに少ない学校である。学習面で特別な支援を必要と思われる生徒が多く在籍していると捉えられており、特別支援教育や全教員で取り組むことの必要性を感じている教員もいるが、今の現状では難しいと捉えている教員もいる。特別支援教育に必要な支援体制としては、外部機関等の活用の割合が高く専門家の力が必要と考えており、職員研修会のニーズもある。授業では、個別の配慮を意識した全体への支援が中心に行われている。支援の必要な生徒への対応については、教員間の話し合いや協力した対応がなされている一方で、特性に応じた対応ができていないと考えている。</p> <p>学びたい内容としては、わかる授業の進め方の他、保護者との連携や就労・進学を見通した支援の在り方が挙げられているのが特徴的である。特別支援教育コーディネーターは、授業の具体的なアイデアや外部機関との連携のしかたが、教職員の研修として必要と考えており、特別支援教育の推進にあたっては、校内での情報共有、保護者との連携、教員に対する支援が必要と考えている。</p>			
<p>研修内容の決定理由</p>	<p>特別支援教育コーディネーターは、生徒の卒業後の進路に向けた指導・支援の必要性を感じており、教員からも学びたいこととして「就労・進学を見通した支援の在り方」が挙げられた。また、支援の必要な生徒への対応について、教員間の協力した対応ができていないという意識がある一方で、特性に応じた対応ができていないと捉えている教員もいた。</p> <p>そこで、まずは生徒の実態を把握した上で指導・支援を検討していく必要があると考え、キャリア形成のための評価と継続的支援を行うために作成された「Scale C<sup>3</sup>」を活用した実態把握に焦点を当てた研修会を行い、指導・支援に結び付けていく流れを考えた。</p>			
<p>研修会</p>	<p>校内研修会① 校内研修会② 校内研修会③</p>	<p>9／10 10／16 11／15</p>	<p>実態把握と発達障がいの理解 &lt;外部講師による講義&gt; 事例検討会（実態把握、指導・支援） 個別の指導計画の作成</p>	<p>【90分】 【60分】 【60分】</p>

(2) A校の実践・結果の分析と考察

ア 活用プログラム プログラム「8 事例検討会（指導・支援）」

(ア) 実践の概要

A校では、年度初めに、当センター研修指導主事による「支援を必要とする生徒の理解と支援」と題した校内研修会を実施し、生徒理解にかかわる基本的な内容についての共有を行った。

その上で、第2回目となる研修会では、研修内容として、困難さを抱える生徒への具体的な支援を検討していく際に、担任及び教科担当等で、困難の状況、背景や要因と考えられることについて情報収集し、複数の視点から支援の方向性を探っていくインシデント・プロセス法を用いた事例検討会を対象生徒の学年担当教員を中心に十数名で実施した。【資料1】は、活用した演習シートである。

(イ) 研修会の内容

本研修会の実施にあたっては、当日に授業研究を兼ねた授業参観を合わせて行い、事例対象の生徒の学習状況について、授業者として捉えられる状況に加えて、参観者として捉えた状況を加味しながら、情報共有ができるようにした。

研修会には、事例対象である生徒の当該学年教員、教科担当教員に加えて、日常的に対象生徒とかかわりの少ない教員も参加し、支援の検討を行った。インシデント・プロセス法に基づき、初めに、事例提供者である担任教員より、現況の概要説明を行い、その内容を踏まえ、より状況を具体化していくための情報収集に関わる質疑を行った。

また、特別支援教育コーディネーターの工夫として、形式的な研修会に留めず、飲み物等を提供しながら、発言がしやすい雰囲気の下に進めていくこととした。【資料2】は、現況の概要と質疑及び教科担当からの補足説明をまとめたものである。

【資料1】プログラム「8 事例検討会（指導・支援）」

演習シート		全体	校内委員会	教科	学年	支援関係者
<b>8 事例検討会(指導・支援)</b>		<b>40分</b>				
【ねらい】 インシデント・プロセス法を用いて、生徒の問題となっている状況に対して、出来事の背景や原因となる情報を収集し、問題解決の方策を考えることができる。						
事前学習 なし						
1	事例対象の確認	生徒名 ( )				
2	一番困っている出来事の提示(事例提供者)	(メモ)				
3	事実・情報の収集(参加者による質問)	(メモ)				
4	支援策の検討	自分がかかわるとしたら、どのような支援を、いつ、誰が、何をするか				
5	グループ協議(支援の検討)					
6	全体における共有	※必要に応じて個別の指導計画に記載する				

演習シート<活用編>	
<b>8 事例検討会(指導・支援)</b>	<b>40分</b>
【ねらい】 インシデント・プロセス法を用いて、生徒の問題となっている状況に対して、出来事の背景や原因となる情報を収集し、問題解決の方策を考えることができる。	
I 校内研修における活用	
演習のみ	演習シートを活用して演習する <span style="float: right;">40分</span>
II 事前準備:	
<input type="checkbox"/> 対象生徒を決める (1名) <input type="checkbox"/> 対象生徒の担任(事例提供者)から困っている出来事を決めておいてもらう <input type="checkbox"/> 付箋用紙(黒板に貼っても字が見える大きめのものがよい) 参加者数×10枚程度 <input type="checkbox"/> マジック <input type="checkbox"/> 解説シート 参加者数分	
III 事前学習:	
IV 演習の流れ:	
1	対象生徒の確認
2	事例提供者から問題となっている出来事を発表する <span style="float: right;">【 2分】</span>
3	参加者が事例提供者に情報収集のための質問をする <span style="float: right;">【 10分】</span>
4	支援策を検討する
(1)	個人作業 <span style="float: right;">【 8分】</span> 自分がかかわるとしたら、どのような支援を、いつ、誰が、何をするか の視点で検討する(付箋用紙に記入)
(2)	グループ内で共有、検討 <span style="float: right;">【 15分】</span> グループ内で検討した結果を模造紙(グループ用)にまとめる
5	全体で共有する(グループごとに発表する) <span style="float: right;">【 3分】</span>
V 事後: ・完成したシートを縮小印刷して全員に配布し、共通理解を図る ・検討した結果を、個別の指導計画に記入しておく	
⇒ 演習シート 4「個別の指導計画の作成」 5「個別の指導計画の活用」 14「校内連携」	

【資料2】現況の概要と質疑等の記録

現況の概要	○課題等を含め、提出物を提出しない状況が続いている。 ○学習への取り組むことにやや消極さが見受けられる。
質 疑	Q:提出物の状況として、何か傾向はあるのか。 →興味のある数学の課題については提出している。しかし、提出期限に遅れることがある。その他については、提出自体が難しい。特に、国語については、苦手意識が強いようだ。
	Q:国語の苦手意識が強いとのことだが、国語の授業の状況について知りたい。 →教科担当より説明 ・ペア学習等による話し合いは、座席配置の配慮により、うまく行っている。特に周囲の女子が気をかけ、話を引き出している。 ・教師側が積極的にアプローチをすることで、取組は促される様子が見られる。 ・入学当初は学習への向き合い方が気になったが、今は前向きに学ぼうとする様子が見られる。 ・課題の提出状況としては、ほとんど提出できていない。 ・他に気になることとして、ファイルの中のプリント整理ができないこと、他教科のノートに国語の内容を書いているなど、どの学習に、どのノートを使うかなどの意識が十分でない様子が見られる。
	Q:学習課題以外の提出物の状況はどうか。 →承諾書等の提出も、期限の最後に提出することが多い。提出物の重要度として、本人が高いと感じないものについては、忘れてしまうのかもしれない。
	Q:部活の様子はどうか。 →部活担当より説明 ・部活自体は、楽しんでできているようだ。一方で、学習課題を終えることに時間がかかるために、部活に遅れることが多い状況にある。
	Q:物の管理や整理にかかわる情報はるか。 ・私物の整理が難しい状況があり、自分でどこに置いたのかを忘れていた様子が見受けられる。また、ノートの使い分けが難しいようだ。

【資料3】事例検討会から個別の指導計画に位置付けた具体的手立て

1 提出物について	・教科間の連携により、課題提出日を分散させる。 ・メモの習慣を支援する。
2 コミュニケーション能力の醸成	・本人と個別に話し、気持ちを聞く機会を設ける。
3 私物の整理	・ファイリングの仕方の練習を設ける。
4 自己肯定感の醸成	・本人の得意な活動を位置付け、評価する。



【写真1】模造紙への手立ての整理



【写真2】研修会の様子

これらの情報共有を踏まえた上で、はじめに参加者個人による見立てと支援の手立ての検討を行った。その後は、個人作業による支援の手立てを基に、2グループに分かれて、支援の手立てを協議、検討することとした。グループ協議では、現況の課題に対する背景や要因と考えられる内容について共有し、課題の焦点化を図りながら、具体的な手立ての検討を進めた。【写真1】は、個人作業での付箋を、グループ協議を通し、模造紙に整理したものである。

グループ協議の内容を全体で共有した後に、【資料3】に示したように具体的な支援の手立てを絞り込み、個別の指導計画に手立てとして位置付けることとした。研修会の様子を【写真2】に示す。

#### (ウ) 実践の結果

##### ① 参加教員による5件法質問紙調査から

本実践に当たり、研修前及び研修後に、参加した教員に対して5件法による質問紙調査を実施し、研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。選択肢は「1 全くそう思わない」「2 あまりそう思わない」「3 どちらとも言えない」「4 ややそう思う」「5 とてもそう思う」の5つとし、自分の考えにもっとも近いものを選ぶようにした。次頁の【表8】は質問紙調査の結果を、研修前後の平均値に着目して比較したものである。平均値の差が統計的に有意であるかを確かめるために  $t$  検定を行った。なお、質問項目①～④については研修の前後で実施し、⑤～⑥については研修後のみ実施した。

この調査結果から、「②今後の支援の進め方の見通しをもつことができている」「③今後の支援についての校内での共通理解が図られている」「④今後の支援について自分が何をすればよいか明確になっている」の3つの質問項目において、有意差が認められた。また、研修後のみ実施した質問項目として「⑤お互いの情報や考えを出し合うことで生徒への理解が深まった」「⑥他の先生方と一緒に考える機会がもててよかった」「⑦このような事例検討会を今後も続けた方がよいと思う」の各質問項目が4.4～4.5ポイントの高い数値を示していることが把握された。

さらに、自由記述からは、「学年団で指導の方向性を話し合っているつもりであるが、ポイントを絞った話し合いの中で、状況の理解と情報共有につながるということが分かった」「生徒にかかわる前提として、教員間での共通理解、認識ができていることが重要であると感じた」とする回答が得られた。

##### ② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査から

参加教員による5件法質問紙調査に加えて、研修会の進行を務めた特別支援教育コーディネーターに対して、プログラムの活用性や内容等についての5件法質問紙調査を実施した。次頁の【表9】は質問紙調査の結果をまとめたものである。

この結果からは、本プログラムを活用した研修の効果として、「生徒の困り感に職員の共通した認識をもつこと」「担任の思いを詳しく聞くこと」「手立てについて、みんなで取り組もうとする雰囲気生まれたこと」などが確認できた。一方で、研修会を進行する上での手がかかりとして進行シナリオなどの改善要望があることも把握できた。

#### (エ) 成果と課題

実践を踏まえて、本プログラムを活用した研修の成果と課題をまとめる。本実践では、特別支援教育の概論的な内容を取り上げるのではなく、実際に関わっている生徒を事例対象として取り上げて、情報共有と支援方針の検討を行った。

その成果としては、参加教員が具体的にどのような見通しをもち、それぞれの役割としてすべきことを明確にしていくことにつながったことが挙げられる。このことは、本実践は研修でありながら、その中で得られた情報、及び具体的な支援の在り方が即指導・支援に生かせるという実感を伴うものであったことによると考える。特に、高等学校での特別支援教育の実践を推し進めていく上では、一般論としてその必要性を学ぶだけではなく、各教員が具体的に、自分の役割として何ができればよいのかを知りたいという思いに応えていく必要がある。その意味で本プログラムを活用した

実践は有効であったと考える。

一方、課題として、各校が今後研修に取り入れていく上では、さらに進行をサポートする詳細の資料についても加えていく必要があると考える。

【表8】プログラム「8 事例検討会（指導・支援）」を活用した質問調査結果（n=11）

質問項目	研修前	研修後	t値
① 問題となっている状況について校内での共通理解が図られている	3.5	3.9	2.1†
② 今後の支援の進め方の見通しをもつことができている	3.3	3.9	3.1*
③ 今後の支援についての校内での共通理解が図られている	3.0	3.9	4.3**
④ 今後の支援について自分が何をすればよいか明確になっている	3.0	3.6	3.1*
⑤ お互いの情報や考えを出し合うことで生徒への理解が深まった	—	4.4	
⑥ 他の先生と一緒に考える機会がもててよかった	—	4.5	
⑦ このような事例検討会を今後も続けた方がよいと思う	—	4.4	
⑧ 自由記述			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段の指導の中で、学年団で指導の方向性を話し合っているつもりであるが、ポイントを絞った話し合いの中、状況の理解と情報共有につながるということが分かった。</li> <li>・ 生徒にかかわる前提として、教員間での共通理解、認識ができていることが重要であると感じた。</li> </ul>			

†:  $p < .1$  (有意傾向), \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$  (有意差あり)

【表9】プログラム「8 事例検討会（指導・支援）」の活用性に関する質問調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	<p><b>5</b> とても活用しやすい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の課題を焦点化することで、直接生徒と関わりの少ない教員も意見を出しやすい。</li> <li>・ 大がかりな準備がいらない。</li> </ul>
② プログラムを活用した研修の効果	<p><b>5</b> 大いにある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人が抱えている「困り感」について、関わる職員全てが統一した認識をもつことができた。</li> <li>・ 普段、対象生徒と関わりの深い担任の思いを詳しく聞くことができた。</li> <li>・ 参加者全員が一つの目標に向かって、建設的な意見を出し合う雰囲気があった。</li> <li>・ 話し合われた手立てについて、みんなで取り組もうという雰囲気が生まれた。</li> </ul>
③ プログラムの内容	<p><b>5</b> とてもよい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「これならできるかも」という思いがもてた。</li> <li>・ 時間が短く、参加する教員の負担にならない時間設定であった。</li> </ul>
○課題及び改善が必要と考えること	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「演習の流れ」に加えて、進行シナリオを急遽研究担当者に作成していただいた。初めて実施する場合には、難しさがあることが予想され、進行シナリオなどが準備されていると実施しやすい。</li> </ul>	

## イ 活用プログラム プログラム「5 個別の指導計画の活用」

### (ア) 実践の概要

前実践では、プログラム「8 事例検討会（指導・支援）」を活用した研修を実施した。前実践から2ヶ月ほどを経過した3回目となる実践では、事例検討会を踏まえてまとめた個別の指導計画に基づき、生徒の評価及び手立ての有効性を確認するため、プログラム「5 個別の指導計画の活用」による研修を実施することとした。【資料4】は、活用した演習シートである。

【資料4】プログラム「5 個別の指導計画の活用」

演習シート		全体	校内委員会	教科	学年	支援関係者
<b>5 個別の指導計画の活用</b>						<b>30分</b>
【ねらい】作成した個別の指導計画をもとに生徒の支援を振り返り、より適切な支援を検討する。						
事前学習 なし (解説シート4個別の指導計画等の作成と活用)						
1 評価 (⇒ 前回作成した個別の指導計画の評価欄に記入)						
2 内容の協議						
(1) 学習上、生活上の困難さの確認 ※新たな困難さや状況があれば加える						
(2) 長期目標、短期目標の妥当性 ※必要に応じて修正する						
(3) 指導や支援の内容、方法の改善・充実の具体策の検討						
5 振り返り 個別の指導計画を再検討して気づいたことや考えたこと						

演習シート<活用編>	
<b>5 個別の指導計画</b>	<b>30分</b>
【ねらい】作成した個別の指導計画をもとに実践を振り返り、より適切な支援を検討する。	
I 校内研修における活用 活用の方：演習シートを活用して演習する 30分	
II 事前準備：	
□対象生徒を決める (1～複数名) ・全校で1人…全体で共有することができるので、全校で共通理解ができる ・学年ごとに1人…学年で共通理解を図ることができる ・グループごとに1人…より多くの生徒について検討することができる ・学級ごとに1人…各学級の生徒について互いに検討し合うことができる	
□グループ編成 (3～5名程度) ・対象生徒の共通理解を図りたいメンバーで構成するとよい。	
□前回作成した個別の指導計画 □今回記入する個別の指導計画の用紙 (グループ用A3拡大版)	
III 事前学習：なし	
IV 演習の流れ：	
1 協議するグループと対象生徒の確認	【5分】
2 短期目標に対する評価をする (個人→グループ)	【5分】
3 指導計画の下記の内容を再検討する	【7分】
①学習上、生活上の困難さ ②長期目標、短期目標 ③指導や支援の内容、方法	【15分】
(1) 個人作業	【7分】
(2) グループ内で共有、検討 グループ内で検討した結果を演習シート(グループ用)にまとめる。	【15分】
4 各自で研修の振り返りをする (演習シートに記入)	【3分】
V 事後：・完成したシートをA4判縮小印刷して全員に配布し、共通理解を図る。	
⇒ 演習シート 1.4「校内連携」	

(イ) 研修会の内容

本研修会については、参加教員へ対象生徒の個別の指導計画を配付の上、目標に対する達成状況を手立てとの関連を踏まえ、学級担任、学年主任、教科担任教員から報告をし、手立ての継続あるいは改善について検討する流れで進めていくこととした。また、研修プログラムでは、グループによる検討内容をA3判の個別の指導計画にまとめることとしていたが、検討内容を参加教員全員で共有するために、模造紙へ書き出していくこととした。次頁の【資料5】は個別の指導計画に基づく支援の経過をまとめたものである。

これらの支援経過の情報共有を行った上で、参加教員が2つのグループに分かれ、経過に基づいて継続していくべき手立てと、改善すべき手立て、新たに加えるべき手立てについて検討を行った。【写真3】は、グループ協議の様子を示したものである。

この過程を通して、参加教員間では、自分たちで考えた手立てがうまく機能していたことを確認しながら、次に対応したい課題についての情報共有がなされた。

時間枠の都合上、次に対応したい課題についての具体的な支援内容の検討までには至らなかったが、「見て捉えることは得意なので、視覚化を図る」「見た情報を記憶に留める方策を得たい」といった方向性を確認することにつながる研修会となった。p.23の【資料6】は研修会を踏まえて新たに確認された支援の方向性をまとめたものである。



【写真3】グループ協議の様子

【資料5】個別の支援計画に基づく支援の経過の協議記録

<p>担任より</p>	<p>具体的手立て：提出物の提出状況改善に向けた課題の分散化について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語，数学，英語の担当者間で，月曜日に数学，水曜日に国語，金曜日に英語を課題提出日とすることとし，加えて，帰宅すると，課題内容を忘れてしまう状況を踏まえ，校内で帰宅前に実施することとした。このことにより，課題の提出状況は改善されている。</li> </ul> <p>具体的手立て：コミュニケーション能力の醸成に向けた本人の思いを聞く場の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本人からの発信が少ないため，個別に本人の思いを聞く機会を設けた。あまり自分のことを語らないかと考えていたが，思いの外，自分が感じていること，考えていることを語ってくれた。また，教員の指導の意図も受け入れてくれた。</li> </ul> <p>具体的手立て：自己肯定感の醸成に向けた得意な活動の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本人だけの取組ではなく，朝のSHRで，全生徒にコグトレを実施している。本人は，視覚優位な状況が把握され，「見る力」をつけるトレーニングの中で，力が発揮され，高い正解率を示している。自信が持てるようになってきているように感じる。</li> </ul>
<p>学年主任より</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の分散化という手立ては，うまくいっていると感じる。ただ，「家でやってきなさい」ではなく，曜日を分散化させ，なおかつ校内でやることで，本人がやり遂げることに繋がっている。</li> <li>・一方，テスト期間中，課題の提出ができなかったことがあった。このことは，テスト期間中は，学校に残ることができなかったためであったと思われる。帰宅すると，課題を出されていることを忘れてしまうことから，やはり学校でやっていく状況が必要と思う。今後は，テスト期間中の対応の在り方を検討していく必要がある。</li> <li>・本人に関わる変化として，家庭で課題をやってくるという負担が軽減したこともあってか，一度だけではあったが，数学の予習を行った上で，授業に臨んでいたことがあった。</li> </ul>
<p>教科担当より</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス内で教え合いの雰囲気が出ていることで，本人の学びに向かう姿勢も少しずつ高まっているように感じる。</li> <li>・分からない言葉について，電子辞書を活用し，その場で調べることができるようにしている。一方で，調べたことを定着させることにはまだ課題があると感じる。</li> <li>・漢字については，書き写しができるので，形としての認識ができていると考えられる。それを記憶に，どう留めていくかが課題であると感じる。</li> </ul>
<p>質 疑</p>	<p>Q:今回，学校として実施している支援について，保護者への説明は行っているか。 →本人の状況を，家庭とも共有しながら，家庭に課題を持ち帰るのではなく，学校で行うことの意図についても説明をした。保護者は，「高校で，そこまでやってもらえるとは思わなかった。本人に合わせた支援がありがたい。この学校に入学させて良かった」と少し涙ぐみながら語ってくれた。</p>

【資料6】個別の指導計画の評価をふまえた新たな支援の方向性

1 提出物について	・教科間の連携により，課題提出日を分散させる →成果があったことから，継続する
2 コミュニケーション能力の醸成	・本人と個別に話し，気持ちを聞く機会を設ける →成果があったことから，継続する
3 自己肯定感の醸成	・本人の得意な活動を位置づけ，評価する →成果があったことから，継続する ・ペア学習などを活用し，自力解決が難しい内容にもかかわる機会を設ける →支援内容に追加した上で，実施する
4 漢字の読み・書きの難しさ	※今後，支援内容を検討することとする

(ウ) 実践の結果

① 参加教員による5件法質問紙調査から

本実践に当たり，研修前及び研修後に，参加した教員へ5件法による質問紙調査を実施し，研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。次頁の【表10】は質問紙調査の結果を平均値に着目してまとめたものである。なお，前回の研修と同様，質問項目①～④については，研修の前後で実施し，⑤～⑥については，研修後のみ実施したものである。なお，対象数は少ないが，参考までに前回と同様  $t$  検定の結果も併せて示す。

この調査結果から，「②今後の支援の進め方の見通しをもつことができている」の質問項目において，有意差が認められた。このことから，個別の指導計画に示した目標についての生徒の達成状況及び支援の手立ての有効性についての評価を行い，継続すべき支援と改善すべき支援を再確認することで，支援の見通しがより明らかになったと捉えられる。一方で，前回研修時に有意差が認められた「③今後の支援についての校内での共通理解が図られている」「④今後の支援について自分が何をすればよいか明確になっている」については，有意な差は認められなかった。

また，研修後のみ実施した質問項目のうち，「⑥他の先生方と一緒に考える機会がもててよかった」の質問項目について，参加した全教員が「5 とてもそう思う」の回答を選択した。さらに，自由記述からは，「先生方との話し合い，出された意見が参考になるものであった」「とてもよい機会であった」とする回答が得られた。

② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査から

研修会の進行を努めた特別支援教育コーディネーターによるプログラムの活用性や内容等についての5件法質問紙調査を実施した。次頁の【表11】は，質問紙調査の結果をまとめたものである。

この調査結果からは，本プログラムを活用した研修の効果として，各教員の取組について関わる教員で確認できたことと，今後の支援について統一した認識で取り組む機会となったことが確認できた。また，前回の「8 事例検討会（指導・支援）」で共通理解を図った指導・支援の成果について確認できることから，継続して活用できるプログラムとして位置付けることが可能であると考えられる。一方で，30分間という時間枠の中でまとめるためには，協議の内容を焦点化する必要があるという課題も把握できた。

(エ) 成果と課題

実践を踏まえて，本プログラムを活用した研修の成果と課題をまとめる。

本実践では，個別の指導計画に基づく一定期間の支援について，情報共有を図りながら，目標達成の状況，及び支援の手立ての成果について，確認を行った。

本実践の成果として、対象生徒の変容を確認しながら、この数か月に位置付けてきた支援の効果を、参加教員間で実感するとともに、新たな課題への取組の方向性を確認することにつながったことが挙げられる。高等学校においても、個別の指導計画の作成率は高くなってきているが、その後の評価、改善の機会については、校務の多忙さからなかなか設定しにくいことと考えられる。このことは、支援内容の形骸化とともに、教員間で実施している支援の手応えを感じる機会を喪失していることにもつながると思われる。高等学校における特別支援教育がさらに広がりをもつためには、教員間での取組が、生徒の成長に実を結んでいることを成果として実感できる機会が必要であると考えられる。

一方、課題として、プログラムの活用にあたって、限られた時間の中で、効率的な情報共有と支援の方針の検討が行われるよう、また、協議内容を焦点化するよう、流れのポイントを明示することなどが挙げられる。

【表 10】プログラム「5 個別の指導計画の活用」を活用した質問紙調査結果 (n=7)

質問項目	研修前	研修後	t 値
① 問題となっている状況について校内での共通理解が図られている	4.0	4.4	2.1 <sup>†</sup>
② 今後の支援の進め方の見通しをもつことができている	3.6	4.4	3.2 <sup>*</sup>
③ 今後の支援についての校内での共通理解が図られている	3.6	4.1	n. s.
④ 今後の支援について自分が何をすればよいか明確になっている	3.9	4.3	2.1 <sup>†</sup>
⑤ お互いの情報や考えを出し合うことで生徒への理解が深まった	—	4.9	
⑥ 他の先生と一緒に考える機会がもててよかった	—	5.0	
⑦ このような事例検討会を今後も続けた方がよいと思う	—	4.9	
⑧ 自由記述			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生方と話し合い、出された意見がとても参考になるものだった。とてもよい機会だった。</li> <li>・大変よい機会だった。</li> </ul>			

n. s. : 有意差なし, † :  $p < .1$  (有意傾向), \* :  $p < .05$  (有意差あり)

【表 11】プログラム「5 個別の指導計画の活用」の活用性に関する質問紙調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	4 概ね活用しやすい ・前回の事例検討会の成果を確認できる内容であった。
② プログラムを活用した研修の効果	5 大いにある ・クラス、学年、教科それぞれの取組について、関わる全職員で確認できた。 ・継続していく支援、改善を要する支援内容について確認し合い、統一した認識で次への取組に進む機会となった。
③ プログラムの内容	4 概ねよい ・30分という時間設定だと、模造紙へのまとめ、発表には無理があった。付箋、模造紙は使わず、個々にワークシートへ記入する方がよりやりやすと感じた。
○課題及び改善が必要と考えること	
・30分という時間設定であったが、話し合いが多岐に渡り、時間をオーバーした。進行担当が協議の内容をある程度焦点化していく必要がある。	

(3) B校の実践・結果の分析と考察

ア 活用プログラム プログラム 「8-2事例検討会②（見立て、指導・支援）」

(ア) 実践の概要

B校では、生徒指導の検討会を定期的に行っているが、新たな試みとして機能的なアセスメントを用いた事例検討会を取り入れることとした。

プログラム作成時は、50分間で実施のプログラムであったが、「機能分析」を初めて聞く教員が多いということや、生徒のことを話題にする時間を十分に確保したいという要望があったため、前半に解説の時間を加え90分間に変更して実施した。

(イ) 研修会の内容

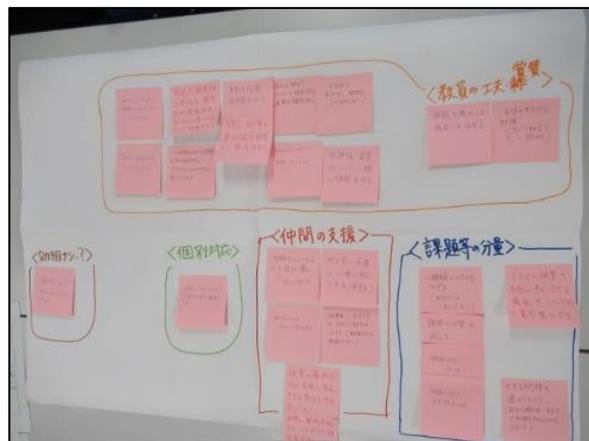
機能分析の説明については、資料を読むだけではなく機能分析に詳しい教員が講師となり説明を加えた。また、行動の機能を分析したり、支援を検討するためのシートについては、具体例をシートに示して説明を加えることで、考えの道筋や記入の内容についてイメージをもつことができるようにした。

対象生徒については、各学年から1名ずつ選出し、学年ごとのグループで話し合った

【写真4】。対象生徒について話し合いを始めると、様々な面からエピソード等が語られ、時間を超過することが多かった。ある学年のグループ協議で話し合われた内容を示した模造紙



【写真4】付箋を用いたグループ協議の様子



【写真5】グループ協議に活用した模造紙

【資料7】グループ協議で話し合われた内容とその後の状況（2名のみ抜粋）

	問題となる行動	行動に対するアクション	結果事象（観察の様子）
● ● さん	姿勢が悪い	個別の声かけ 「10分でも良いので正そう」	最初は効果的だったが、次第に薄れた
		「今は何をする時間かな？」	
■ ■ さん	課題に取り組まない (授業参加)	個別指導 「遅れてきたけど、理由があるんだよね」	反応なし
		個別指導	起き上がった
		個別指導	反応あり
		個別指導	反応鈍い
	*気が付いたこと…アトピーの持病があり常にかゆみを感じている。身体のあちらこちらを掻く様子がみられる。		
■ ■ さん	課題に取り組まない (授業参加)	個別の声かけ 「ここがヒントだよ」	すぐ取り組み始める
	遅刻	個別指導 「遅れてきたけど、理由があるんだよね」	素直な態度が見られる 理由を話す
	整容	個別指導	以前と比べると反抗的でない 成績と関係があるかも
	成績	個別指導	「次（後期）は、ちゃんとやります」
	*その他の変化…以前と比べ、反抗的な様子が見られなくなった。 昨年より欠席が減っている。		

が【写真5】である。様々な支援が出された中、「過去に行ったが効果が見られなかった支援」が分類して確認されていたことが特徴的であり、「効果がない支援」も今後の支援の大事な情報として取り上げられていた。グループ協議の中から、今後の支援に向けての手立てをまとめたものが【資料7】である。

なお、本研修会後に実践後の状況を確認する研修は設定しなかったため、特別支援教育コーディネーターがその後の情報を紙面で確認した。3週間支援を行った様子も併せて【資料7】に示す。

#### (ウ) 実践の結果

##### ① 参加教員による5件法質問紙調査から

本実践にあたり、研修前及び研修後に、参加した教員へ5件法による質問紙調査を実施し、研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。次頁【表12】は、質問紙調査の結果を平均値に着目してまとめたものである。平均値の差が統計的に有意であるかを確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行った。研修会には途中から参加した教員が数名おり、研修後のみの調査に回答している。自由記述で尋ねた感想の一部も示す。

この調査結果から、「機能分析を知っている」という項目については、1%水準で有意差が認められ、研修の有効性が明らかとなったほか、「機能分析という言葉は聞いたことがなかったが、実際我々が普段教育活動でやっていることなのでよく理解できた」や「生徒に対しての今後の支援のやり方がわかり、結果が楽しみです」など機能分析を理解したという記述が見られた。また、「普段から他の先生と話し合っていたことだが時間をかけて対策を『見える化』できたので、大変よかった。見える化することで、行動もしやすくなるので、生徒に対しても行動・活動への見える化を図っていきたい」や「一人でもやもや考えているのではなく、先生方と一緒に考えを出し合うことができスッキリした」と集団で情報を共有しながら考える良さを実感し、支援に対する前向きな感想が見られた。「機能分析の考え方を支援に生かしていきたいか」という質問項目に対しては、研修の前と後にかかわらず、4.0ポイント以上の高い数値であった。

また課題として、「1回の研修会ではどのような効果が表れるのか、またうまくいかない場合の試行錯誤のための研修会も考えると、この先が少し見通せなくなった」という1回の研修会で効果を得ることの難しさを訴えた意見も挙げられ、同内容で継続した研修会を実施する必要性が認められた。

##### ② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査

参加教員による質問紙調査に加えて、研修会の進行を務めた特別支援教育コーディネーターに対して、プログラムの活用性や内容等についての5件法質問紙調査を実施した(【表13】)。

この調査結果から、活用のしやすさとプログラムの内容については「4 概ねよい」という評価であったが、研修の効果については、その後の指導・支援の実践の中で困っている様子が見られたことから「どちらとも言えない」という結果が得られた。また、機能分析を理解するための説明等の工夫が必要であることや、取組時期の提案、話し合うグループのメンバー構成の工夫等の意見が得られた。

#### (エ) 成果と考察

本プログラムを活用した成果は、生徒の行動の背景を探りながら、望ましい行動を考える道筋を体験できたことであると考えられる。また、学年で配慮の必要な生徒について、支援の方向性や具体的な方法について共有することができたことも成果だと考える。

課題としては、支援実践後の変容を記録にまとめたが、効果的な支援ではなかった場合に次の手立てを考えることができず支援が行き詰ったことである。特別支援教育コーディネーターによる質問紙調査からも、グループのメンバーに専門的な視点から考えることのできる教員がいるか否かによって、手立てまで話し合うことができるかどうか左右されることが述べられている。改善策としては、継続して行われる2回目以降の話し合いには、助言ができるように特別支援教育コーディネーターや管理職、外部からの専門家等が入ることや、メンバーを変えて実施することなどが考え

られる。

【表12】プログラム「8-2 事例検討会②（見立て，指導・支援）」を活用した質問紙調査結果  
(n=12)

質問項目	研修前	研修後	t値
① 機能分析を知っている（理解できた）	1.82	3.75	6.04**
② 機能分析での事例検討を支援に生かしたい	4.00	4.33	n. s.
③ 自由記述			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に対しての今後の支援のやり方がわかり，結果が楽しみです。</li> <li>・普段から他の先生と話し合っていたことが，時間をかけて対策を「見える化」できたので大変よかった。見える化することで，行動もしやすくなるので，生徒に対しても行動・活動への見える化を図っていきたい。</li> <li>・「維持している結果事象」は問題行動と代替行動で分けてあげると考えやすい（代替行動によって起きる事象も生徒によっては進歩している事象も含まれるため）。一人でもやもや考えているのではなく，先生方と一緒に考えを出し合うことができスッキリした。</li> <li>・まだよく理解できていないが，生徒の支援について具体的に話し合いがもてたことはよかった。常に思うのは周囲の支援の在り方と同様にどうやって本人の“どうにかしたい”気持ちを引き出すかという部分です。</li> <li>・教員同士で（学年団で）生徒への支援策を考え，共有するよい機会となった。</li> <li>・ゆるやかに学年団で対策（手立て）を考える時間ができたことがよかった。</li> <li>・1回の研修会ではどのような効果が表れるのか，またうまくいかない場合の試行錯誤のための研修会も考えると，この先が少し見通せなくなった。やはり継続してみてもからの生かせる内容と思った。まずは実施してみても手応えを得たいと思う。</li> </ul>			

n. s. : 有意差なし, \*\*:  $p < .01$  (有意差あり)

【表13】プログラム「8-2 事例検討会②（見立て，指導・支援）」の活用性に関する質問紙調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	<p><b>4</b> 概ね活用しやすい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・問題行動に対して，望ましい行動や代替行動等，様々なルートから支援を考えることができた。</li> </ul>
② プログラムを活用した研修の効果	<p><b>3</b> どちらとも言えない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学年で一人の生徒について話し合うことができたことはよかったが，3週間後に結果を相談した時，次の一手を考えることができずに困っている様子があった。</li> </ul>
③ プログラムの内容	<p><b>4</b> 概ねよい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1枚のシートで実態から支援までの流れを掴みやすく，どのような生徒にも活用できると思う。</li> </ul>
○課題及び改善が必要と考えること	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・機能分析について説明があったことで理解できた。紙資料を読むだけでは難しいのではないかな。</li> <li>・年度の始めや定期考査後の成績が出た後に次へ向けてなど，取り組みやすい時期がある。</li> <li>・学年でグループを設定したが，グループ内にある程度の指導の経験をもち，細やかに生徒を見ることが出来る教員がいるかどうか，話し合いが充実したものになるのか影響するよう思った。</li> </ul>	

## イ 活用プログラム プログラム「10 授業づくり（指導・支援）」

### (ア) 実践の概要

事前のアンケートから「学習指導の充実」が必要だと捉えている教員が多く，「特別な支援が必要と思われる生徒に合わせた授業の進め方」や「授業研究会で，生徒がわかる授業の理解を深めること」についての研修のニーズが高かった。また，中高連携の取組の一つとして授業公開の機会があ

るとのことであったため、2回目は、特別な支援が必要な生徒への指導・支援を含む全体への指導を検討するための授業づくりについて研修を行うこととした。【資料8】は、活用した演習シートである。

【資料8】プログラム「10 授業づくり（指導・支援）」

演習シート	全体	校内委員会	教科	学年	支援関係者
<b>10 授業づくり(指導・支援)</b>					<b>50分</b>
【ねらい】ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりについて知り、授業づくりのヒントを得ることができる					
事前学習 なし					
1 現在自分が目指している授業は・・・(2分)					
2 DVDを視聴し、別紙1「いいね！探し」(左側)に指導や支援の工夫を記入(20分)					
小学校4年(算数) 13分					
高校1年(数学) 7分					
3 別紙1「いいね！探し」(右側)に記入したことをペアで共有し、理由を記入(5分)					
4 3で話し合ったことを全体で確認(5分)					
5 生徒になったつもりで考えてみよう(10分)					
6 目指している授業に向かって一歩踏み出すとしたら・・・(8分)					

演習シート<活用編>		50分
【ねらい】ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりについて知り、授業づくりのヒントを得ることができる		
I 校内研修における活用	演習のみ：DVDを活用して演習する	50分
II 事前準備：		
<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザインを取り入れた授業のDVD <input type="checkbox"/> 授業作りに向けての確認事項のパワーポイント <input type="checkbox"/> ホワイトボード <input type="checkbox"/> 演習シート 参加者数分		
III 事前学習：		
IV 演習の流れ：	1 自分が目指す授業のイメージをもつ 【2分】 2 DVDを視聴して、指導や支援の工夫を探る 【20分】 3 ペアで、指導や支援の意図を考える 【10分】 4 全体で共有する 【5分】 5 生徒になったつもりで考えてみよう・パワーポイント 【10分】 6 目指す授業にむけてできることを考える 【3分】	
V 事後：なし		

(イ) 研修会の内容

今回の授業づくりの研修会は、センター所員が進行した。

はじめに、各教員の目標を視覚化することで自分の授業について改めて考える時間であることの意識付けが必要と考え、各教員がどのような授業を目指しているのかをプリントに記入した。

DVD資料として用いたのは、一昨年度の研究協力校の教員及び当センターの所員が行った提案授業である。司会者がポイントを示すのではなく、視聴した各教員が自分で見付ける形にして、【資料9】のプリントに記入した。

「生徒になったつもりで考えてみよう」の項目では、事前に、授業でどのようなことに困り感があるかを授業者へ調査し、目指す授業像がイメージできるよう、具体例も示しながらパワーポイント資料にまとめて研修会で各教員に問いかけた。作成する場合に留意したことは、生徒それぞれの成長に注目することと、各教員が持っている困り感の視点を基に「どのような授業であれば、その困り感を改善できるか」ということを考えることである。具体的には、困り感として挙げられた「集中力が続かない」「すぐ忘れる」を切り口に「どんな授業であれば集中できるのか」を考える必要があることを確認した。

また、支援の具体的な方法の資料として、「特別支援教育の視点を生かしたわかりやすい授業づくり」(平成24・25長崎県教育センター)と『ユニバーサルデザイン』の4つの視点について(平成

【別紙1】 いいね！探し	
小学校 算数	支援や指導の工夫
	視のために(理由)
高校 数学	支援や指導の工夫
	視のために(理由)

【資料9】使用したプリント

26・27佐賀県教育センター)を最後に配付した。「自分の目指す授業」や「一步踏み出すとしたら」に記入された内容の一部を示す(【資料10】)。

**【資料10】「自分の目指す授業」と「一步踏み出すとしたら」の解答の内容の一部(3名分抜粋)**

自分の目指す授業	一步踏み出すとしたら
生徒が起きている授業 「おもしろい」が0.1%以上ある授業 日々の忙しさのなかでも最低限の中身を保障できること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を使って地図、王朝、河川の位置を表現させる工夫をしたい</li> <li>・具体物、身近な例を示してから授業に入る</li> <li>・「あなたならこんな時にどう考える? どうする?」といった場面を設定して考えさせてから先哲の思想、哲学を学ばせることで少しは自分事として捉えさせたい</li> </ul>
全員参加する、全員思考する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活との関わり、自分自身への関わり(古典、現代文)</li> <li>・どのラインまでの理解をよしとするか</li> <li>・振り返り(記憶の強化)</li> </ul>
分かりやすい授業 生徒の活動を多く入れる授業 知りたいと思える授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の流れの細分化(プリントで作成)</li> <li>・学習の流れのチェックや見通し</li> <li>・問題(レベル分け)の設定</li> <li>・具体物や写真の活用を多くする</li> </ul>

自分の目指す授業に近付けるために、具体物や写真を活用したり、身近な例などを示したりすることで理解しやすくする工夫のほか、個のレベルに合わせた問題の設定や、振り返りの場の設定、さらにはどのラインまでの理解をよしとするかなどの評価に関わる内容が記述されており、生徒を主体とした授業を意識した内容が見られた。

(ウ) 実践の結果

① 参加教員による5件法質問紙調査から

本実践にあたり、研修後に参加した教員へ5件法による質問紙調査を実施し、研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。次頁の【表14】は研修後の質問紙調査の結果をまとめたものである。各質問項目に対して5つのそれぞれの選択肢を選んだ人数とともに項目ごとの平均値を示した。自由記述で尋ねた感想の一部も併せて示す。

「参考になることがあったのか」「得たヒントを授業に生かしたいと思ったか」について、どちらも平均4.6ポイントと高い結果となった。自由記述では、「生徒に合わせた授業を試行錯誤していきたい」「小学校の授業づくりが参考になった」「普段、意識している内容と一致する部分が多かったので自分のやっていることに自信を持ち、生徒の活動頻度を増やすようにしたい」の回答が得られた。

② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査

特別支援教育コーディネーターに対して、プログラムの活用性や内容等についての5件法質問紙調査を実施した結果は次頁【表15】のとおりである。

特別支援教育コーディネーターによる評価は、プログラムの活用のしやすさ、活用した研修の効果ともに高く、活用しやすく効果のある研修と捉えていることが明らかとなった。プログラムの内容としては、2つ視聴したうちの小学校の授業を分かりやすいと捉えていることから、本プログラムの活用の鍵は、どのような授業をモデル授業として示すかにあると思われる。また、課題としては、「時間超過」の問題や、「2つの授業を観る意義」を明確にする必要性が挙げられた。

(エ) 成果と課題

本プログラム活用の成果としては、モデルとなる授業をDVDで観ることによって「授業づくりのヒントが得られた」「自分の授業に生かしたい」とほとんどの教員が捉えていること、具体的な工夫についても各教員が考えをもって記述することができていたことから、今後自分がどのような授業づくりを行っていけばよいかというイメージがもてたことである。これは、授業の中の工夫を探すという視点を示した上で授業のDVDを観ることによって、指導や支援の意図を考えることにつながったからではないかと考える。演習の中で記入した「一步踏み出すとしたら」には、具体的な指導や支援についての内容が含まれており、授業改善を考えるに当たり、教師自身がどのような授業が生徒に

必要なのかを考え、そのために必要な授業の中での活動や支援を考えるきっかけになったと考える。さらに特別支援教育コーディネーターによる質問紙調査の結果、評価が高かったことから、活用しやすく効果の高いプログラムであったと言える。

活用する際の課題としては、モデルとなる授業の映像を観る際の留意点として、どのような授業を教員が求めているかということを押さえた上で、そのニーズに合わせた内容、本数を検討することである。

【表14】プログラム「10 授業づくり（指導・支援）」を活用した質問紙調査結果(n=16)

質問項目	大いにあった・思う (5)	あった やや思う (4)	どちらとも いえない (3)	あまり 思わない (2)	まったく 思わない (1)	平均
① 授業づくりについて参考になることがあったか	9	7	0	0	0	4.6
② 得たヒントを授業に生かしたいと思ったか	11	4	1	0	0	4.6
③自由記述						
<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援が必要な生徒が多くなってきた実感は大いにあるので、今までの自分の授業を見直す必要があると考えている。しかし、考えれば考えるほど、高校卒業程度として求められる力と授業で身に付く力に差が出てくる気がする。そのギャップをどうすればよいか悩むところである。</li> <li>・生徒に合わせた授業を試行錯誤していきたい。</li> <li>・研究授業で発表するので、今日の研修会で得た考え、知識を大いに生かしていきたい。その時限りにならず、やはり生徒の「分かる」を増やすためにどんどん私自身学んでいきたい。</li> <li>・小学校の授業づくりはとても参考になる。高校にとっては頭が下がる工夫ばかりだった。いただいた資料中の英語の部分の参考をしたいと思う。</li> <li>・改めてわかりやすい授業をしなければと思った。自分を磨くことを続けたい。</li> </ul>						

【表15】プログラム「10 授業づくり（指導・支援）」の活用性に関する質問紙調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	5 とても活用しやすい ・流れがわかりやすい。 ・教科により授業は様々だが、同じような観点で授業を考えている。
② プログラムを活用した研修の効果	5 大いにある ・授業を公開するという目的があり、行動する(授業を工夫する)きっかけになったと思う。
③ プログラムの内容	4 概ねよい ・小学校のビデオが分かりやすかった。
○課題及び改善が必要と考えること	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオを2つ観たことで時間を超過したこと。</li> <li>・2つの授業からの共通点を探るのであれば2つ観る意義があると思う。</li> </ul>	

#### ウ 活用プログラム プログラム「11 授業づくり・事前研究会」

##### (ア) 実践の概要

前回の授業づくりの研修会を経て、実際に公開する予定の3つの授業について事前研究会を行った。3つの部会に分けて検討する案も考えられたが、より多くの教員から意見をもらった方が、授業者にとっては考えるヒントが多く得られると考え、参加者全員で検討する流れにした。

また、授業公開日には授業を振り返る場が設定できないとのことであったため、録画した授業を観ながら後日振り返りの研修会を実施することとした。本実践の後半に、事後研究会の内容につ

いても示す。【資料11】は、事前研究会で活用した演習シートである。

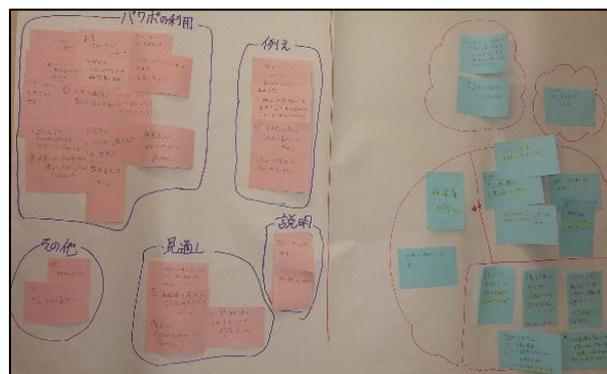
【資料11】プログラム「11 授業づくり・事前研究会」

演習シート		全体	校内委員会	教科	学年	支援関係者
<b>11 授業づくり・事前研究会(指導・支援)</b>						<b>50分</b>
【ねらい】 授業づくりのヒントを得ることができる						
事前学習 なし						
1 授業のねらいについて (授業者…2分)						
2 生徒のつもりで模擬授業を受け、「良いと思った点」「改善が必要な点」を付箋に記入 (2.5分)						
3 付箋を模造紙に貼り、内容ごとに仕分けを行い、キーワードを記入 (5分)						
4 全体で共有し、改善策を考える (1.5分)						
5 授業者から (2分)						

演習シート<活用編>	
<b>11 授業づくり・事前研究会(指導・支援)</b>	
<b>50分</b>	
【ねらい】 授業づくりのヒントを得ることができる	
I 校内研修における活用 「模擬授業」を「指導案提示」に置き換えた場合 (IV 添削の流れ「2 模擬授業」を指導案の説明【1.0分】にする) 3.5分	
II 事前準備: 二付箋 (2色) 二模造紙 演習シート 参加者数分 ビデオカメラ・二脚 二授業者が授業で使用する教材や教員等	
III 事前学習: なし	
IV 演習の流れ	
1 授業者から授業のねらいについて伝える	【3分】
2 授業者は模擬授業を行う 参加者は授業に参加しながら、「良いと思った点」「改善が必要な点」を色別に付箋に記入する	【2.5分】
3 付箋を貼り、内容ごとに仕分けをする	【5分】
4 全体で共有し、課題への手立てを考える	【1.5分】
5 授業者から、感想や取り入れたい点について参加者に伝える	【2分】
V 事後: ・授業者は、自分でビデオを活用し自己研修をする ・授業実践後、事後のまとめをする	

(イ) 研修会の内容

50分間の中で3つの授業を検討する要望が特別支援教育コーディネーターから出されたため、授業の導入部分に絞って検討することとした。授業者は、本番と同様に授業をし、その他の教員が生徒役となって参加をする模擬授業の形式で行った。特別教室を使用する教科以外は、時間短縮のために研修場所で行った。その後、それぞれの授業について、各教員が、色分けした付箋に「良かった点」と「改善が必要な点」について記入して模造紙に貼り、それを基に意見を交流した (【写真6】)。出された意見を取り入れるかについては、授業者が決定することとした。



【写真6】演習で活用した模造紙

授業公開日は、授業についての協議の場がないことから、参観者に対して、授業についての感想をアンケート用紙に記入することをお願いした。その際、次頁【資料12】のように、その授業においてどのような工夫を行って授業づくりをしたのかを提示することで、参観してほしいポイントを示した。当初は中高連携の場という設定であったが、その後の学校の担当者同士の話し合いの中で小学校や特別支援学校の教員も参加して地域一帯で児童生徒の教育について考える場に広がり、幅広い校種から感想が得られた。

後日、事後研究会を持ち、模擬授業を行った3つの授業の様子をダイジェストにまとめたDVDを観た後、参観者からの感想をまとめたものを教員に紹介した。3名の授業者からはそれぞれ、事前研究会を受けて検討した点について、「振り返りの内容を絞った」「具体物を使用してはどうかと

【資料12】 参観者へのアンケート用紙に示した参観してほしいポイント及び感想のまとめ（一部）

<p>参観授業① 数学A（標準クラス）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・導入で今日の学習内容のおおよそが掴めるよう工夫</li> <li>・学習内容に身近な題材を取り入れ、知的好奇心や興味関心を喚起できるよう工夫</li> <li>・数学的な見地を実験的な要素を取り入れることで理解に結びつける</li> <li>・生徒に予測させるなど、考える時間を作っている</li> <li>・ペアワークなどの共同作業を取り入れ、全体の活発化を図る</li> </ul>	<p>参観者の感想＊数学A標準</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 導入段階で、ゴール設定が明確であり、生徒が意識高く授業に参加できたと思う。</li> <li>・ 導入で、高級ブランド牛を引き当てるということを行うことで、とても生徒が興味をもって確率を求めていこうと意欲づけになっていた。</li> <li>・ 場合分けのイメージが沸きづらい単元で、実際に確率をカードを引いて求めさせる意欲と単元理解を高めるものだったと思った。</li> </ul>
<p>参観授業② 数学A（基礎クラス）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の既習内容に合わせたゴール設定</li> <li>・ポイントを言葉で確認し定着を図る</li> <li>・生徒と教員の役割を明確に分担し、学習内容を絞り込むことで理解できるように工夫</li> <li>・テンポ良く授業を進め、授業の流れを作るように工夫</li> <li>・視覚的な要素も取り入れながら、興味関心を喚起できるよう工夫</li> </ul>	<p>参観者の感想＊数学A基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校の基本計算の大切さを感じた。</li> <li>・ 少人数で、生徒と先生の距離が近く、学習に集中しやすい環境作りがなされていた。</li> <li>・ 黒板周辺がスッキリして刺激になるものがなく、小学校でも参考にしたい。</li> <li>・ 説明を聞くことと書く作業を分けて、目を向けて説明をしつかりと理解させようという工夫が大事だと思った。</li> <li>・ 下位の生徒達に粘り強く教えている姿を見て、大変有り難い。</li> </ul>
<p>参観授業③ 化学基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元として、何を学習するか一目で分かるよう提示</li> <li>・パワーポイントやアニメーションを利用し、視覚から情報が得られるよう工夫</li> <li>・身近な話題を取り入れ、興味関心を引きながら、生徒のイメージを喚起できるよう工夫</li> <li>・既習内容を踏まえながら教員の発問内容を工夫</li> <li>・学習内容で押さえておきたい部分は、具体物を作成し活用</li> </ul>	<p>参観者の感想＊化学基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ パワーポイントやアニメーションを活用し、分かりやすかった。中学校でも参考にしたい。</li> <li>・ 大切なところは、大きな紙で大きな字で注目させていたところが、とても良いと思った。</li> <li>・ 単元の計画が全てできているのがすごい。</li> <li>・ 小学校の教え子もいたが、どちらかという学力の低い子ども達に楽しくていねいに指導していただいていた、先生方に感謝。</li> </ul>

いう意見があったが、その後の学習内容を考え、図を変更した」「授業のねらいに迫るためにゲームの内容を変えた」との説明があった。参観者による感想を共有することで、指導・支援の手立てについての確認を行った。

(ウ) 実践の結果

① 参加教員による5件法質問紙調査から

事後研究会後に参加した教員に対して5件法による質問紙調査を実施し、事前研究会における研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。次頁の【表16】は質問紙調査の結果をまとめたものである。自由記述で尋ねた感想の一部も併せて示す。

「事前研究会の成果があったか」は平均3.8ポイントであり、あったと捉える教員が11名いる一方で「どちらともいえない」と回答した教員が4名であった。「参考になることがあったか」は4.3ポイント、「授業研究会をやる意義はあるか」は4.5ポイントと高い数値であった。

さらに、事後研究会において授業のDVDを観た際には、授業を行った教員から「自分の授業を初めて見て、話すスピード、量に驚いた」と、自分の授業を客観的な視点から捉えた気付きが感想として出された。また、研修者の自由記述には、「自分の授業を振り返る機会となった」「普段から生徒をよく観察して、臨機応変に授業に臨まなければならないと痛感した。今後、授業改善に生かしたい」という授業改善への前向きな感想や、「これだけは全ての生徒に身に付けさせることを共通理解すること」「特別支援についての助言が欲しい」「ついてこれない生徒への対応」

等の専門的な視点からの助言を望む意見が挙げられた。

② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査

特別支援教育コーディネーターに対して、プログラムの活用性や内容等についての5件法質問紙調査を実施した結果は【表17】のとおりである。

この調査結果から、特別支援教育コーディネーターは、活用のしやすさについては、流れが分かりやすいことから「5 とても活用しやすい」と捉えていること、研修の効果については、授業を工夫するきっかけになったという理由から「4 概ねある」と捉えていること、さらに、内容については、ビデオの分かりやすさから「4 概ねよい」と捉えていることが示された。課題としては指導が困難な生徒への対応を個別に検討する必要性が挙げられた。

【表16】プログラム「11 授業づくり・事前研究会（指導・支援）」を活用した質問紙調査結果(n=17)

質問項目	大いにあった (5)	あった (4)	どちらとも いえない (3)	あまり 思わない (2)	まったく 思わない (1)	未記入	平均
① 事前研の成果があったと思うか	2	9	4	1	0	1	3.8
② 参考になることがあったか	6	9	1	0	0	1	4.3
③ 授業研をする意義はあると思うか	8	9	0	0	0	0	4.5
④ 自由記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回、このような形で“授業における特別支援”について切り込むことができ、大変有意義な学びをさせていただいた。先生方の強力な協力のおかげだと思う。</li> <li>・自分の授業を振り返る機会となった。様々な校務に追われる中、教材研究はとても難しい。もっと教材研究ができればどの先生もよい授業が作れると思う。</li> <li>・様々な生徒のニーズに対応することは大変なことであると思うが、自分ができることから始めようと思った。</li> <li>・当日の研究会では、校種の垣根を越えて様々な意見・感想を載くことができとても参考になった。</li> <li>・どの先生方も分かりやすく、下の生徒に合わせて授業をしていた。スローペースで授業しているにもかかわらずついて来られない生徒がいる。</li> <li>・校内の先生方の意見を聞くことが多いので、もう少し専門の方の意見や改善点の指摘等をいただきたいかった。</li> <li>・特別扱いではなく、あくまでもできるように環境調整することだと思った。</li> <li>・丁寧であること、生徒に寄り添う姿勢があること、工夫がなされていること、そのそれぞれについて、日々の取組は県内のみならず、全国に出しても評価いただけるものと確信した。</li> </ul>						

【表17】プログラム「11 授業づくり・事前研究会（指導・支援）」の活用性に関する質問紙調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	<b>5</b> とても活用しやすい ・事前の準備が必要なく、気軽に参加できる
② プログラムを活用した研修の効果	<b>4</b> 概ねある ・それぞれの気づきを授業の中の工夫として取り入れていたと思う ・教員の意識の向上につながっていた
③ プログラムの内容	<b>4</b> 概ねよい ・公開授業に向けてという目的があったが、これが日常的に取り組めるプログラムになるとよいと思う
○課題及び改善が必要と考えること	
・全体への指導を考えるきっかけとなったが、それでも指導が困難な生徒への対応について検討する場が必要であった。	

(エ) 成果と課題

2回目の授業づくりの研修会を受けて、3回目となる本研修会は模擬授業形式の事前研究会を行った。教員への質問紙調査の結果から、「参考になることがあったと思うか」「授業研究会をする意義

はあると思うか」についてはあると考えている教員がほとんどで、平均値も4.3～4.5ポイントと高かった。さらに、自分の授業づくりに生かしたいという感想や、授業者自身の自分の授業に対する気付き等が得られたことから、一定の効果はあったと言える。その一方で、「事前研究会の成果はあったか」については、あったと考える教員が他の項目と比較して少なく、「どちらともいえない」と回答する教員もおり、自由記述の内容から、専門的な視点からの助言を望んでいることが見えてきた。特別な支援を要する生徒の割合が多いと捉えているB校の教員にとっては、日常的に指導・支援に対する困り感も大きく、専門的な視点からの指導・支援を求める期待の大きさの表れではないかと考える。本研修においては、校内で進めるプログラムの活用という趣旨から「教員同士で作り上げることを目標にしていたため、助言は行わなかったが、支援を必要とする生徒の割合が多く困り感の大きい学校については、専門的な視点からの助言を加えながら本プログラムを活用することで、研修効果が高まると思われる。

教科の枠を超えて授業研究会を日常的に行うことの少ない高等学校において、事前研究会を行ったことは画期的なことであった。B校は特別支援教育に対する教員の意識が高く、研修会や情報共有を定期的に行っている学校であり、そのような土壌があったからこそ授業研究会の意義についての意識も高く、授業研究会を実施したり、授業者が事前研究会を受けて授業を改善したりすることにつながったのではないかと考える。また、自分の授業を客観的に観る機会が少ないことや、授業研究会があまり実施されていないことから、日常の授業をDVDに撮って自己評価をすることでも気付きがあり、授業を振り返るきっかけになったと考える。

プログラムを活用する際の改善点は、一度に3つの授業を扱ったことである。今回のように、導入の場面など場面を絞って複数の授業を検討する意義もあると考えるが、対象の授業を絞って授業全体の流れも含めて検討することによって授業者の考える授業がより明確になるため、授業研究会を実施することに慣れていない場合は特に、改善点についての意見が出しやすくなると思う。

(4) C校の実践・結果の分析と考察

ア 活用プログラム プログラム「3 実態把握と支援の検討」

(ア) 実践の概要

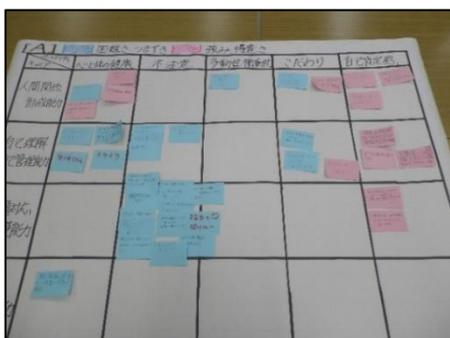
C校では、「Scale C<sup>3</sup>」を活用した実態把握を行い、それを全教員で共通理解し、支援の手立てを考えて共有し、実践するという流れで進めることとした。

はじめに、9月の校内研修会において、宮城学院女子大学の梅田真理教授を講師に招き、「Scale C<sup>3</sup>」の説明と発達障がいの子どもの状態と実態把握についての講義を行った。その後、校内で支援を検討したい生徒3名を抽出し、それぞれの担任が「Scale C<sup>3</sup>」によるチェックを行った。

本研修会では、その中の1名について「Scale C<sup>3</sup>」の観点に基づいて実態を整理し、全教員で共通理解を図りながら、具体的な支援の手立てを考え、各自で実践することとした。【資料13】は活用した演習シートである。なお、全教員による共通理解を図るための工夫として、演習シート「1 実態把握」の欄を模造紙に拡大して転記し、各教員が生徒の具体的な行動を書き出した付箋を貼り付けて整理をした（【写真7】）。

【資料13】プログラム「3 実態把握と支援の検討」

演習シート		全体	校内委員会	教科	学年	支援関係者
<b>3 実態把握と支援の検討</b>						<b>60分</b>
【ねらい】「スケールC <sup>3</sup> 」を活用して生徒の実態をつかみ、指導や支援の見直しをもつ。						
事前学習 1) 解説シート3 「発達障がいの子どもの状態と実態把握」に目を通しておく 2) 補助シート 「Scale C <sup>3</sup> 」に記入をして対象生徒の実態を把握しておく						
<b>1 実態把握</b>						
パフォーマンス	心と体の健康	不注意	多動性・衝動性	こだわり	自己肯定感	
人間関係 形成能力						
自己理解・ 自己管理能力						
課題対応 基礎能力						
キャリアプラン ニング能力						
<b>2 短期目標および具体的な支援</b>						
優先順位	短期目標	具体的な支援の内容、方法（自分ができること）				
①						
②						
③						
<b>3 振り返り</b> （実態把握を通して気づいたこと、役に立ったこと）						



【写真7】模造紙に転記した「1 実態把握」

演習シート<活用編>		60分
<b>3 実態把握と支援の検討</b>		
【ねらい】「スケールC <sup>3</sup> 」を活用して生徒の実態をつかみ、指導や支援の見直しをもつ。		
<b>I 校内研修における活用</b>		
理解：(事前学習にて解説シート3に各自で目を通しておく)		
「ScaleC <sup>3</sup> 」をチェックする。補助シート3		15分
演習：研修後半に、演習シート3を活用して演習する		45分
		計 60分
※前半の補助シート3のチェックを、事前にやっておくことで、45分に短縮できる。		
<b>II 事前準備：</b>		
<b>① 対象生徒を決める（1～複数名）</b> ・全校で1人…全体で共有することができるので、全校で共通理解ができる ・学年ごとに1人…学年で共通理解を図ることができる ・グループごとに1人…より多くの生徒について検討することができる <b>② 対象生徒の担任（教科担任、学年主任等）にチェックリストを活用して実態把握をしてもらう</b> ・事前に「Scale C <sup>3</sup> 」を記入して実態把握のための資料とする。 ★パターン1:対象生徒に関わっている複数の教員でそれぞれチェックする場合 ★パターン2:担任がチェックしたものを共有する場合 <b>③ グループ編成（3～5名程度）</b> ・対象生徒の共通理解を図りたいメンバーで編成するとよい。 <b>④ 個人用</b> ①チェックリスト「Scale C <sup>3</sup> 」を参加人数分 ★パターン1:各教員がチェックしたものを持参してもらう ★パターン2:担任がチェックしたものを参加人数分コピーして準備しておく ②演習シート「3 実態把握と支援の検討」を参加人数分 <b>⑤ グループ用</b> ①演習シート「3 実態把握と支援の検討」(A3拡大版)をグループ数分 ②付箋用紙…2色分（得意と苦手な部分を別々に記入する）、一人各10枚×人数分		
<b>III 事前学習：</b> 1) 解説シート3 「発達障がいの子どもの状態と実態把握」に目を通しておく。		
<b>IV 演習の流れ：</b>		
1 グループの確認、対象生徒の確認		【2分】
2 「ScaleC <sup>3</sup> 」を各自でチェックする。(★パターン1の場合)		【13分】
担任がチェックした「ScaleC <sup>3</sup> 」を確認する。(★パターン2の場合)		
3 「ScaleC <sup>3</sup> 」のチェックしたことをもとに実態把握をする。		
(1) 個人作業		
・付箋に 問題となる行動(困難さ)と 強み を書き出す。		【10分】
・書き出した付箋を、演習シート3の実態把握の表の該当と思う欄に貼り付ける。		【5分】
(2) グループ内で共有、検討		【5分】
・発表しながら付箋をグループ用シートに貼り付けて共有する。		
・問題となる行動をまとめて整理する(1～3点に絞る)。		
4 グループ内で1問題となる行動(3-(2))をもとに、1短期目標(期待する姿)を決める。		【10分】
5 グループ内で「短期目標」を達成するための具体的な支援を出し合い、全体でやるべきことを確認し、自分ができるところを各自のシートに書き込む。		【10分】
6 グループ内で、次の事例検討会までにやることを確認する(全体、個人)。		【2分】
7 各自で研修の振り返りをする(演習シートに記入)。		【3分】
<b>V 事後：</b> ・各グループで確認した「2 短期目標および具体的な支援」の記述内容を、特別支援教育コーディネーターがまとめて全員(関係者)に配布し、次の検討会の日程も併せて共通理解を図る。 ・検討した結果を、個別の指導計画に転記する。 ⇒ 演習シート 5「個別の指導計画の活用」、14「校内連携」		

(イ) 研修会の内容

今回の校内研修会の実施に当たって、チェックリストである「Scale C<sup>3</sup>」を配付し、9月の校内研修会において説明された「Scale C<sup>3</sup>」の観点や支援の手立てを検討する視点について確認を行った。【資料14】は、その概要をまとめたものである。

その後、対象となる生徒1名について、困難さやつまずきが見られる場面と本人の強みや得意さが見られる場面を、具体的な行動レベルで付箋にそれぞれ書き出し、「パーソナリティ」領域のどの項目と、「キャリア」領域のどの項目に関連している行動であるかが分かるように、各自で当てはまると思われる欄に貼った。【表18】は、校内研修会に参加した教員が話し合いながら分析、整理した内容をまとめたものである。

【資料14】 研修会の概要

<p>&lt;概要・目的&gt;○生徒の実態を把握する手段として「Scale C<sup>3</sup>」を活用する</p> <p>○「Scale C<sup>3</sup>」における「パーソナリティ」と「キャリア」の観点から実態を把握する</p>	
<p>●「パーソナリティ」とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒自身の状態を表す</li> <li>・個人の全体的な特性の総体で、環境に対する独自の行動様式を決定する組織体である</li> <li>・「心と体の健康」「不注意」「多動性・衝動性」「こだわり」「自己肯定感」の5領域から構成される</li> </ul>	<p>●「キャリア」とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒自身が将来自立に向けて必要となる能力を表す</li> <li>・「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだししていく連なりや積み重ね（文部科学省、2012）」のことである</li> <li>・「人間関係形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応基礎能力」「キャリアプランニング能力」の4領域から構成される</li> </ul>
<p>&lt;研修内容&gt;</p> <p>①「パーソナリティ」領域のどの部分が「キャリア」領域のつまずきに影響しているか、「キャリア」領域のつまずきが将来的に予想される困難さとどのような関連があるか等について分析する</p> <p>②これらの実態把握を活用した事例検討会を行うことにより、長期目標や短期目標の設定につなげ、可能な支援の手立てについて検討をする</p> <p>③生徒の様子を観察や、他の職員から生徒に関する情報の提供により、講じた手立てが有効であったか等を検証する</p>	

【表18】 協議の中で出された対象生徒の困難さと強み（▲：困難さ，○：強み）

	心と体の健康	不注意	多動性・衝動性	こだわり	自己肯定感
人間関係	<p>▲はさみをうまく使えない</p> <p>○運動能力は普通程度</p> <p>○体育の授業では積極的、一生懸命</p>		<p>▲貧乏ゆすり</p>	<p>○ユーモアのセンス</p> <p>▲ラリーなどができず自分のペース</p>	<p>○言われたことはやろうとする</p> <p>○他者への気遣い(手伝ってもらったときのお礼や対応)</p> <p>○級友と楽しく会話する</p>
自己理解・自己管理能力	<p>▲にぎやかなところが苦手</p> <p>▲苦手分野(理解できないこと)には最初から興味なし</p> <p>▲生活リズムの乱れ</p> <p>▲イライラ</p>	<p>▲忘れ物をする</p> <p>▲物をなくす</p> <p>▲プリント等が整理できない</p>		<p>○あきらめない</p> <p>▲自分のやり方へのこだわり(掃除など)</p> <p>▲途中から作業に取り組むことが苦手(臨機応変が苦手)</p>	<p>○得意分野(興味のあること)には積極的</p> <p>○言葉遣いが丁寧で礼儀正しい</p> <p>○「分からない」と言える</p>
課題対応基礎能力		<p>▲指示を聞くことができない</p> <p>▲長い説明を聞く(理解する)ことが難しい</p> <p>▲作業(資料集使用)で内容が理解できない</p> <p>▲細かい作業が苦手、雑、時間内に終わらない、期限が迫ると焦る</p> <p>▲コンパス等道具をうまく使えない</p> <p>▲板書を丁寧に写せない、遅い</p> <p>▲計算ができない(割算不可)</p> <p>▲漢字が読めないことが頻繁</p> <p>▲宿題ができない</p>			<p>○友人の助けを借りて協力して作業に取り組む。</p> <p>○自分の役割をしっかりとこなしたいという思いがある。</p>
キャリア能力	<p>▲自己表現がうまくできない</p>				

## 【資料 15】対象生徒の課題と支援の手立て

支援を要する課題の優先順位
① 指示が聞けない・内容が理解できない。 ② 生活リズムが乱れている。 ③ イライラへの対処方法が身につけていない。
課題①「指示が聞けない・内容が理解できない」についての生徒の実態
・指示を出した際の反応として、うなずきはある。 ・「～をしてから～をする」のような一度で複数のことの指示になると、混乱する様子が見られる。 ・「音楽がうるさい」と話すことがあった。ロングホームルームに遅れて参加することもある。音や人に敏感なのかもしれない。大勢が苦手なのかもしれない。
課題①「指示が聞けない・内容が理解できない」についての支援の手立て（共通）
(1) 本人を中心に、目を見てゆっくり話す。 (2) 指示は1つに絞る。 (3) 本人に配慮したペアを組ませて活動させる。 (4) 支援員を活用する。

この作業を通して、「パーソナリティ」領域の「不注意」を要因とすると思われる「キャリア」領域の「課題対応基礎能力」の困難さが、具体的場面として多数見られることと、「パーソナリティ」領域の「自己肯定感」が「キャリア」領域の様々な能力と関連して表れていることが見えてきた。

これらの実態把握から支援を要する課題について優先順位を検討し、その中で「指示が聞けないこと」「指示の内容が理解できないこと」という指示の理解に関する課題について、再度その場面の様子等を詳しく話し合いながら、具体的な支援方法について共通理解した。その上で、各自で支援を行い、生徒の様子を観察することとした。【資料 15】はその概要である。

### (ウ) 実践の結果

#### ① 参加教員による5件法質問紙調査

研修前及び研修後に、参加した教員に実施した5件法質問紙調査の結果を次頁【表 19】に示す。自由記述で尋ねた感想の一部と、対象数は少ないが、参考までにt検定の結果も併せて示す。

この調査結果からは、「②生徒に対する、今後の支援の見通しがもてている」の質問項目において、1.2ポイントの平均値の上昇が見られた。また自由記述からは、「各教科の様子等について知らなかった実態もあったので、共有することができ新しい気づきがあった」「他の先生と話をすることで、漠然と感じていたことがはっきりしてきたし、支援の方向性が見えてきたと思う」「Scale C<sup>3</sup>の表は、実態把握をする上で分かりやすかった」「表を使うことでその子の特性について理解を深めることができた」とする回答が得られた。

#### ② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査から

研修会の進行を努めた特別支援教育コーディネーターによる、プログラムの活用性や内容等についての質問紙調査を実施した結果が次頁【表 20】のとおりである。

調査結果から、研修の効果については、教員が感じていることを共有できたことや支援の見通しをもてたことから、効果があると捉えていること、活用については、実態を共有する際に付箋を活用することの取り組みやすさや視覚的な捉えやすさなどから活用しやすいと捉えていることが把握できた。また、プログラムの内容については、コーディネーターとして話し合いをまとめる力量についての心配があることが把握できた。

### (エ) 成果と課題

以上のことから、「Scale C<sup>3</sup>」の観点に基づいて実態を整理することにより、より詳細な生徒の実態把握が可能となったと思われる。また、模造紙による表を用いながら具体的な場面における生徒

の行動と困難さの背景を結び付けて共有し、それを全教員で共通理解を図ることにより、幅広い視点から支援の具体的な手立ても考えることができたのではないかと考える。

課題としては、特別支援教育コーディネーターから「ScaleC<sup>3</sup>」の理解不足が挙げられた。項目による整理表を活用するだけでなく、内容について理解を深めることでさらに生徒の実態把握や、指導・支援についての見通しを立てやすくなるを考える。特別支援教育コーディネーターからは実施後に「対象生徒について全教員に『ScaleC<sup>3</sup>』を記入してもらったこともできたのではないかと」という改善案も出された。実際に記入することによって、どのような観点で生徒を見ていけばよいか明瞭になり、それによって「パーソナリティ」領域及び「キャリア」領域に含まれるそれぞれの項目の理解を深まると考える。

【表 19】プログラム「3 実態把握と支援の検討」を活用した質問紙調査結果 (n=7)

質問項目	研修前	研修後	t 値
① 対象生徒の実態（得意な部分と苦手な部分など）を理解している	4.0	4.5	n. s.
② 生徒に対する、今後の支援の見通しがもっている	2.8	4.0	6.3**
③ 自由記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科の様子等について知らなかった実態もあったので、共有することで新しい気づきがあった。</li> <li>他の先生と話をすることで、漠然と感じていたことがはっきりしてきたし、支援の方向性が見えてきたと思う。</li> <li>「Scale C<sup>3</sup>」の表は、実態把握をする上で分かりやすかった。いろいろディスカッションできたこともよかったと思う。様々な方法を試してみて、個々にあった支援について共通理解するのを感じた。</li> <li>先生方でも研修の機会があれば生徒理解が深まるのが分かった。普段話をしているだけでは、足りていなかった部分もあるのだと思った。表を使うことでその子の特性について理解を深めることができた。</li> <li>今日の研修を通じて他教科での問題点などを知ることができた。今後も先生方と情報を共有しながら生徒の指導に役立てたい。</li> </ul>		

n. s. : 有意差なし, \*\* :  $p < .01$  (有意差あり)

【表 20】プログラム「3 実態把握と支援の検討」の活用性に関する質問調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	<p>4 概ね活用しやすい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>付箋を利用して実態を出し合うやり方は取り組みやすく、視覚的に生徒の抱える課題を捉えることができるのがよい。</li> </ul>
② プログラムを活用した研修の効果	<p>5 大いにある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>職員それぞれが感じていたことを共有できたのが一番よかった。</li> <li>指導に不安をもっていた先生もいたかもしれないが、情報交換し、支援の方法を検討することで少し見通しがもてたと思う。</li> </ul>
③ プログラムの内容	<p>4 概ねよい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ぜひ今後もやってみたい方法だが、職員の考え方がバラバラだとまとまらない可能性もある。今回はセンター担当者にやってもらい何とかしたが、話し合いをまとめる力量が問われているようで心配である。</li> </ul>
○課題及び改善が必要と考えること	
<ul style="list-style-type: none"> <li>「ScaleC<sup>3</sup>」についてももう少し事前に勉強しておけばよかったと思う。準備不足だった。</li> </ul>	

## イ 活用プログラム プログラム「4 個別の指導計画の作成」

### (ア) 実践の概要

今回は、1名の生徒について、「Scale C<sup>3</sup>」の観点に基づいて実態を整理し、全教員で共通理解しながら、共通の具体的な支援の手立てを考えた。それから約1か月経過した11月の本研修では、各自が実践した支援の内容や方法について、プログラム「4 個別の指導計画の作成」を活用して振り返りながら評価を行うこととした。また、前回取り上げた課題について、長期目標や具体的な場面における短期目標の設定、支援の内容や方法の再検討も行うとともに、その他に挙げられた課題についても、前回取り上げた課題と同様の内容を検討することとした。【資料16】は、活用した演習シートである。今回も、全教員での共通理解が図りやすくなるよう、前回使用したシートの項目「2 短期目標および具体的な支援」と、今回使用するシートの項目「1 個別の指導計画の作成」について、模造紙に転記したものを用意した（【写真8】p.41）。前者は、話し合いによって出されたものを直接記入し、後者は、振り返りの観点に沿って付箋にそれぞれの内容を書き出し、貼り付けることによって整理をした（【写真9】p.41）。

### (イ) 研修会の内容

はじめに、前回使用した模造紙を提示しながら、本人の困難さや強みについて共通理解できたこと、「Scale C<sup>3</sup>」の観点から「パーソナリティ」領域と「キャリア」領域における困難さがどのような行動として表れているかについて明らかになったこと、本人の課題に優先順位をつけながら支援を共通のものとして設定できたことについて確認をした。

そして、前回取り上げた課題①「指示が聞けない・内容が理解できない」について、各自が取組んだ手立てを、「生徒に期待した姿」「支援をした場面」「実際に行ったこと」「生徒の行動・反応」の4つに分けて付箋に記入した。プログラム「4 個別の指導計画の作成」の「1 個別の支援計画の作成」において、「生徒に期待した姿」は「短期目標」、「支援をした場面」は「場面」、「実際に行ったこと」は「指導や支援の内容・方法」、「生徒の行動・反応」は「評価」にあたることを説明し、転記した模造紙にそれぞれの付箋を貼って、各自が行った実践について一人一人発表をしながら振り返った。【資料17】(p.42)は、その内容についてまとめたものである。

## 【資料16】プログラム「4 個別の指導計画の作成」

演習シート		4-1 個別の指導計画の作成		30分
【ねらい】 個別の指導計画を作成し、書き方を考えるとともに、指導や支援の見直しをもつ。				
事前学習 1) 解説シート4「個別の指導計画等の作成と活用」				
1 個別の指導計画の作成 <small>＝補助資料</small>				
学年・組 年 組 氏名				
◎：生徒のよさ、得意なこと、興味・関心 ▲：学習や生活上困難なこと ◎体育は積極的で一生懸命 ◎言われたことはやろうとする(役割をしっかりとこなしたい) ◎「分からない」と言える ◎友達の手助けを借りて協力して作業ができる …etc ▲指示が聞けない、指示の内容が理解できない ▲生活のリズムが乱れている ▲イライラへの対処ができない ▲忘れ物をしたり、物をなくしたりする …etc		長期目標 (1年後の具体的な姿)		
短期目標 (1～3ヶ月後の具体的な姿)	場面	指導や支援の内容、方法	評価	
北海道教育委員会 (2015) .「発達障がいのある子どもの指導や支援に関する基礎的な知識や技能を習得するための校内研修プログラム」より引用一部改変				
2 振り返り (個別の指導計画を作成して、気づいたこと)				

演習シート<活用編>		4 個別の指導計画の作成		30分
【ねらい】 個別の指導計画を作成し、書き方を考えるとともに、指導や支援の見直しをもつ。				
I 校内研修における活用				
理解	研修前半(又は、事前に各自で)、個別の指導計画等作成と活用	解説シート	10分	
演習	研修後半に、演習シートを活用して演習する	演習シート	30分	
				計 40分
※前半の解説シートの部分を、事前に各自で読んできてもらおうと、30分に短縮できる。				
II 事前準備:				
□ 対象生徒を決める (1～複数名)				
・全校で1人…全体で共有することができるので、全校で共通理解ができる				
・学年ごとに1人…学年で共通理解を図ることができる				
・グループごとに1人…より多くの生徒について検討することができる				
□ 対象生徒の担任(教科担任、学年主任等)から、生徒のよさや得意なこと、困難さや苦手なこと等をまとめておいてもらう。				
・事前に用紙を渡して記入してもらい、当日はA4判用紙に拡大してグループに配布できるようにしておく				
・時間短縮できる				
□ グループ編成 (3～5名程度)				
・対象生徒の共通理解を図りたいメンバーで編成するとよい。				
□ 個人用 演習シート4-1、4-2を参加人数分				
□ グループ用 演習シート4-1 (A3拡大版)、付箋用紙				
III 事前学習: 1) 解説シート4「個別指導計画等の作成と活用」				
2) 補助シート「行動面に関する個人関係面に関する指導・支援の実践」				
IV 演習の流れ:				
1	グループの確認、対象生徒の確認			【2分】
2	問題となっている状況の共通理解(口頭による/プリントによる)			【5分】
3	長期目標、短期目標、指導や支援の内容・方法について検討する。			
	(1) 個人作業			【5分】
	※補助シート「行動面に関する指導・支援の実践」			
	「人間関係面に関する指導・支援の実践」を参考に			
	(2) グループ内で共有、検討			【15分】
	グループ内で検討した結果を演習シート(グループ用)にまとめる。			
4	各自で研修の振り返りをする(演習シートに記入)			【3分】
V 事後: ・完成したシートを縮小印刷して全員(関係者)に配布し、共通理解を図る。				
・検討した結果を、個別の指導計画に転記する。				
→ 演習シート 5「個別の指導計画の活用」、14「校内連携」				

課題の複々性	短期目標	具体的な支援の内容方法 (自らがやること)
① 指示を聞くことができない・理解できない		(1) 支援員についてもらう (2) 彼を中心に、目を見てゆくり話す (3) 指示することを1つに絞る (4) ペアを組ませる(ただし作業は必要)
② 生徒の対処 登校しない日がある		(1) 教科毎に履習できた時数分カードにしてシールや色塗り
③ 何やらへの対処 机を叩く・暴言		(1) 一度に書く量を少なくする。
④ 早めから休むと言えぬ		(1) 支援員がいない時、声をかける様子を和らげる。 教師担任が様子を見て

【写真8】模造紙に転記した「2 短期目標および具体的な支援」(前回使用したシート)

① 生徒の不適切な言動・興味関心 ▲ 学級生活の困難なこと		長期目標	
短期目標 (1週間以内)	場面	具体的な支援の内容方法	評価

【写真9】模造紙に転記した「1 個別の支援計画の作成」(本研修で使用したシート)

その後、プログラム「4 個別の指導計画の作成」のシートに各自が実践した内容をそれぞれ書き込み、「評価」を踏まえて、「短期目標」や「場面」、「指導や支援の内容・方法」を継続させるか、または新たなものに修正するか等について検討しながら進めることにより、個別の指導計画としての活用が可能であることをセンター所員が説明した。

実践の発表場面では、特別支援教育コーディネーターが進行役となり、すべての教員が忌憚なく本人の実態や支援についての意見を発言しやすくなるよう、各教員が口頭で発言する場を設けるなどの配慮をしながら進めた。課題①「指示を聞くことができない・理解できない」についての実践交流を行う中で、前回の研修会で取り上げられなかった新しい課題についても焦点が当てられて生徒の詳細な実態が語られ、そこから具体的な支援の方法が明らかになる場面が見られた。【写真10】(p. 42)と【資料18】(p. 43)に話し合いの様子と概要を示す。

有効な支援の手立てとして、課題①「指示を聞くことができない・理解できない」についての今後の支援と、今回の協議で新たに出された課題に対する支援について、【資料19】(p. 43)のように確認し共通理解を図った。新たな課題については、前回使用したシートの「2 短期目標および具体的な支援」を転記した模造紙に、協議で確認された内容を記録した。

【資料 17】「個別の指導計画の作成」にかかわる項目に記入された内容の一部

短期目標 (生徒に期待した姿)	場面 (支援をした場面)	指導や支援の内容・方法 (実際に行ったこと)	評価 (生徒の行動・反応)
ノートを取る	書き切ることができない時	写真を撮影させた	ノートを書き切ることができた
授業の開始に間に合う	体育の前の移動の時	「始まるよ」と声をかけ一緒に移動した	指示を受けてから急いで準備をして授業に間に合った
遅れてもいいので授業に来る	体育に少し遅れて来た時	チームを決めるのを待った	一緒にグーパーをしてチーム決めに参加した
登校する	1週間以上休んだ時	支援員が待ち合わせた	登校することができた
テストを受ける	登校した時	テストを休まないよう声かけをした	テスト前2日は遅れたが登校しテスト勉強はしていた
板書を写す	授業中	書く範囲を短く区切り適宜机間巡視を入れた	ノートにしっかりと書くことができた
意思表示や反応をする	現代社会でグループワークによる授業内容の確認をする時	間に入りながら授業で取り上げた項目や用語について確認をした	理解できたときはうなずき、難しいときには「分からない」という反応が表れた
どんな形でもいいので学校に来る	欠席が続いてきた時	手紙を家のポストに入れた	手紙を渡した直後は学校に来なかった
漢文の訓読、書き下し文、口語訳を書く	しばらくぶりに授業に参加し、何となくボーッとしていた時	配付済みのプリントの問題に戸惑っていたので個別に学習するかと問いかける「明日早めに登校してみる？」	「できれば…」と言ったが、結局来なかった
話しかけたら答える	夜のコンビニでばったり会った	「明日はちゃんと来てね」と言った	「テストなので行きます」と言った、挨拶もできた



【写真 10】話し合いの様子

【資料 18】 実践を共有する中で明らかとなった生徒の実態や支援の内容・方法

生徒の実態	支援の内容・方法
<p>【体育の時間に遅れる時の共通点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・声をかける人がおらず、一人になっている。</li> <li>・前の時間の授業のノートを取り終えていないなど、やることをすべて終えないと次の活動に取り組むことができない</li> </ul>	<p>【体育に遅れる本人を待つことができない場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別に声をかける必要がある</li> <li>・「このチームに入って」のように、本人が迷わず動くために必要な指示を短く具体的に出す</li> </ul>
	<p>【板書をノートに書き写す場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板を写真で撮影し、それを見ながら写させる</li> <li>・本人が書きやすいように内容を細かく区切って話ししながら、板書をする</li> </ul>
<p>【登校しない時の傾向】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本人にとって必要性を感じるできない活動がある</li> <li>・週初めに登校することができないと、その週は登校できない</li> <li>・学校の活動に対して目一杯になっている</li> </ul> <p>【途中から登校する時の共通点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援員や友達からのメールがある</li> <li>・「今日はどう?」「起きている?」など、プレッシャーをかけないメッセージを複数回送った</li> </ul>	<p>【登校しない日が続く場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・登校できた日には、その状態が継続できるように本人への声かけや対応を確実にを行う</li> <li>・出席しなければならぬ日数の枠を作り、そこに色を塗らせたりシールを貼らせたりする支援も考えられるが、条件をクリアしたとたんにもたまたま学校に来なくなることも予想される</li> </ul>
<p>【自分から意思表示ができない時の共通点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援員がいない</li> <li>・個別の声かけができない</li> </ul>	<p>【支援員がいない場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科担任が本人の様子を見て個別に声をかける</li> </ul>

【資料 19】 協議によって確認された課題と支援の内容

課題に対する手立て	今後の支援
①本人を中心に、目を見てゆっくり話す	プレッシャーをかけすぎず、本人が意思表示できるような話し方に留意しながら、複数回やり取りができるようにする
②指示は1つに絞る	引き続き留意しながら指示を出す
③本人に配慮したペアを組ませて活動させる	活動状況を確認しながら、必要に応じて個別に声かけを行う
④支援員を活用する	引き続き支援員と情報共有を図りながら支援する
新たな課題	支援の方向性（共通のものとして取り組む具体的な支援内容・方法）
①登校しない日が続く	教科毎に履修できた時数分をカードに表し、シールを貼らせたり色塗りをさせたりする
②板書を写すのが苦手	一度に書く量を少なくする
③自分から意思表示ができない	支援員がいないとき、教科担任が様子を見て声をかける

## (ウ) 実践の結果

### ① 参加教員による5件法質問紙調査

本実践も、研修前及び研修後に、参加した教員に対して5件法による質問紙調査を実施し、研修プログラムを活用した研修の効果について明らかにすることとした。次頁【表 21】は質問紙調査結果をまとめたものである。質問項目①～②については、研修の前後で実施し、③の自由記述については、研修後のみ実施した。自由記述で尋ねた感想の一部と、対象数は少ないが、参考までに  $t$  検定の結果も併せて示す。

調査結果から、「①対象生徒の実態を理解している」においては実践前後で平均値の変化はほとんど見られなかったが、「②生徒に対する、今後の支援の見通しがもっている」の質問項目において、平均値に1.1ポイントの上昇が見られた。自由記述からは、「生徒の特徴を踏まえて共通理解を図りながら、長期的展望に立って指導していくことが大切であることが分かった」という長期目標を見据えて共通理解を図ることの大切さや、「生徒に対する具体的な支援の方針や方策が分かってよかった」「今後の見通しを立てることができてよかった」「とりあえずやってみるということが共有できてよかった」等の今後の見通しを具体的にもてたことのよさを感じている回答が得られた。

### ② 特別支援教育コーディネーターによる5件法質問紙調査から

特別支援教育コーディネーターに対して、プログラムの活用性や内容等について実施した5件法質問紙調査結果を次頁の【表 22】に示す。

この調査結果から、研修の効果については、支援方法や内容の見通しがもてたことから「5 大いにある」と捉えていること、活用のしやすさについては、実態把握から支援方法を考える流れを理解できたことから「4 概ね活用しやすい」と捉えていること、内容については、支援を考える一連の流れを体験できたことから「4 概ねよい」と捉えていることが明らかとなった。また、課題としては、教科ごとの授業における工夫や、指導・支援が効果的かどうかの検証や情報交換の必要性が挙げられた。

## (エ) 成果と課題

本実践は、前回の実態把握及び共有した指導・支援の実践を振り返り、指導・支援の修正を行い、個別の指導計画の作成につなげていくものであった。

プログラム「4 個別の指導計画の作成」のシートの観点に沿って実践の振り返りを行い、それを基に今後の支援について検討し、共通理解を図るとともに、次の段階の個別の指導計画に反映させることができた。また、検討を進めていく中で対象生徒の新たな課題が見えてきたため、その課題について新たな指導・支援の検討を進める流れとなった。特別な支援を必要とする生徒の実態把握は一度に完璧にできるものではなく、様々な観点から実態把握を進めたり、指導・支援を行い効果があるかどうかを確認しながら進めたりすることによって、しだいに明らかになってくるものである。また、生徒の実態は、その都度変化しているものでもある。そのような把握しにくく日々変化していく生徒の実態を、協議の中で確認しながらそれに合わせた指導・支援を検討できたことから、本プログラムは、把握しにくい生徒の実態に対応できるプログラムであったと考える。

また、前回の研修会と比較して、様々な実態や支援のアイデアについて活発な意見交流がなされていた。これは、本研修会が2回目の事例検討会であり、教員が進め方に慣れてきたことと、前回の研修会で教員がやるべきことを明確にして指導・支援の実践に入ったことが影響しているのではないかと考える。

課題としては、特別支援教育コーディネーターが話し合いをまとめる力量への心配を感じていたことから、協議の際の視点やポイントなども、プログラムに示していく必要があると考える。

【表 21】プログラム「4 個別の指導計画の作成」を活用した質問紙調査結果 (n=7)

質問項目	研修前	研修後	t 値
① 対象生徒の実態（得意な部分と苦手な部分など）を理解している	3.9	4.1	1.5 <sup>†</sup>
② 生徒に対する、今後の支援の見通しがもてている	2.9	4.0	4.3 <sup>**</sup>
③ 自由記述			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の特徴を踏まえて、共通理解を図りながら、長期的展望に立って指導していくことが大切だとわかった。</li> <li>・生徒に対する具体的な支援の方針や方策が分かってよかった。</li> <li>・様々な支援を試し、様子を観察したい。</li> <li>・とりあえずやってみるということが共有できてよかった。</li> <li>・授業を進めていくとき、生徒本人と話をするときの対応について、今後の見通しを立てることができてよかった。</li> </ul>			

† :  $p < .1$  (有意傾向), \* :  $p < .05$ , \*\* (有意差あり)

【表 22】プログラム「4 個別の指導計画の作成」の活用性に関する質問調査結果

質問項目	回答及び記述内容
① プログラムの活用のしやすさ	<p>4 概ね活用しやすい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実態把握から目標を立て、支援方法を考える流れが分かった。</li> </ul>
② プログラムを活用した研修の効果	<p>5 大いにある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援方法、内容が共有出来たことで見通しがもてた。</li> </ul>
③ プログラムの内容	<p>4 概ねよい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の支援を考える一連の流れを体験することができた。</li> </ul>
○課題及び改善が必要と考えること	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科によって生徒の状況が違うので、授業での具体的な対応は教科担任が工夫しなければならない面もある。こまめな検証と情報交換が必要だと思う。</li> </ul>	

(5) 実践前後の結果の分析

研究協力校各校において、研修プログラムを活用した研修会と指導・支援の実践を組み合わせた取組の有効性を検証するため、実践前の5月と実践後の11月に教員の特別支援教育に対する意識及び行動の変容を確認する質問紙調査と、実践後に特別支援教育コーディネーターの意識を尋ねる質問紙調査を実施した。この2つの調査結果は次のとおりである。

ア 教員対象の質問紙調査から

(ア) *t*検定による比較

p. 12 に示した項目の調査結果について、各項目の平均値を実践前後で比較し、統計的に有意差があるかを確認するため、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った。その結果、「Q12 支援の必要な生徒に対しての次の対応を実施していますか」の中の、「⑨生徒理解や特別支援教育に関する研修会を実施すること」に有意差が認められた(【表 23】)。また、「Q2 支援が必要な生徒に対する支援に取り組んでいますか」と「Q5 高等学校で特別支援教育は必要だと思いますか」に有意傾向が認められた(【表 23】)。なお、各項目の選択肢の内容は、Q12が「1. 全くできていない」から「4. 十分にできている」、Q2が「1. よく取り組んでいる」から「4. 取り組んでいない」、Q5が「1. とても必要」から「4. 必要ない」のそれぞれ4つである。

このことから、実践を通して、各教員の「支援に必要な生徒に対して、生徒理解や特別支援教育に関する研修会を実施している」という意識が高まったことが明らかとなった。

【表 23】 教員対象の質問紙調査において有意差及び有意傾向の認められた項目とその結果

質問項目	実践前	実践後	<i>t</i> 値
Q12 支援の必要な生徒に対しての次の対応を実施していますか ⑨ 生徒理解や特別支援教育に関する研修会を実施すること	2.60	2.97	2.82**
Q2 支援が必要な生徒に対する支援に取り組んでいますか	2.10	1.95	1.69 <sup>†</sup>
Q5 高等学校で特別支援教育は必要だと思いますか	1.53	1.70	1.80 <sup>†</sup>

\*\* :  $p < .01$  (有意差あり), <sup>†</sup> :  $p < .1$  (有意傾向)

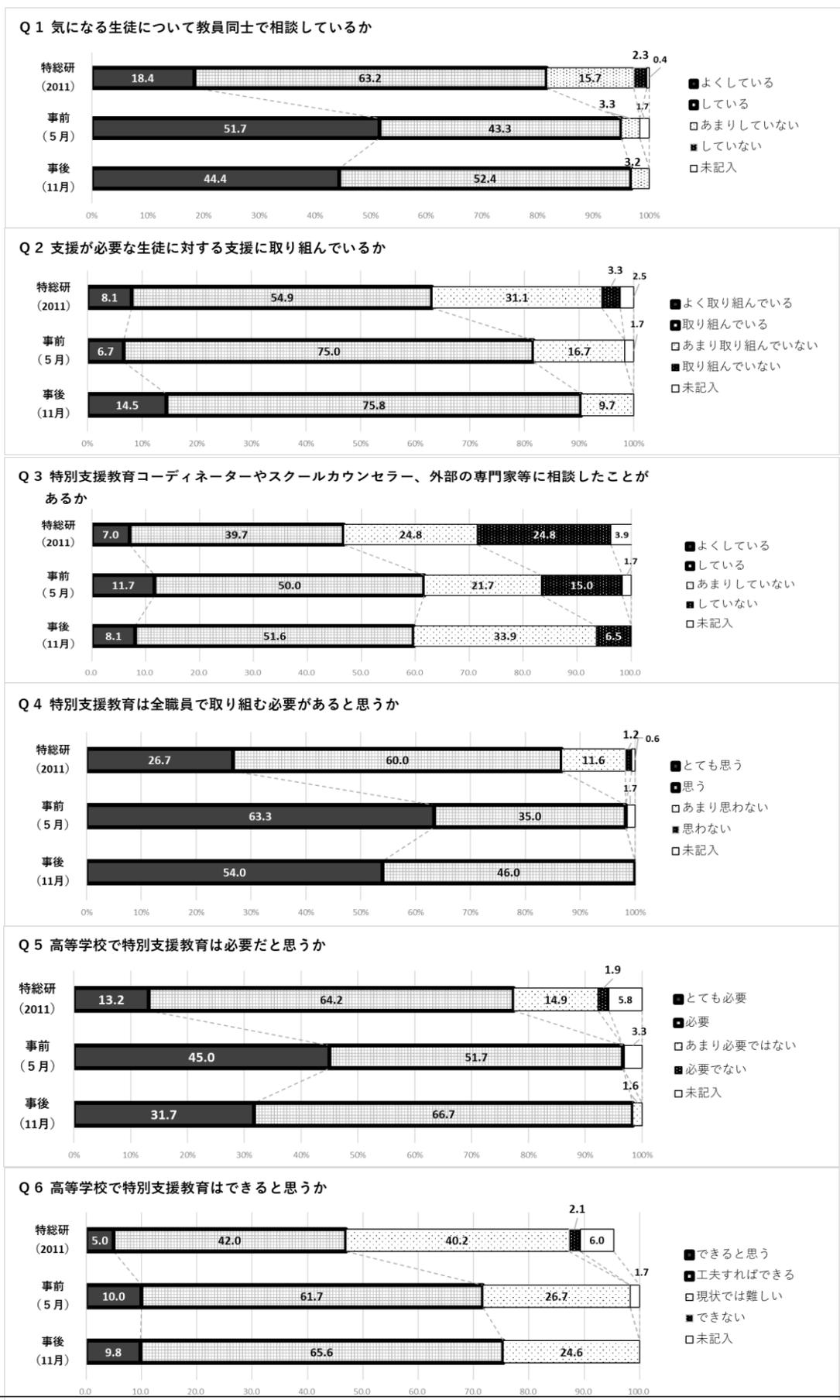
(イ) 肯定的回答の割合の比較

さらに、実践前後の詳細な変化を確認するため、質問紙調査の特別支援教育に対する意識に関わるQ1～Q6までと、授業中の工夫の実施状況を尋ねたQ11(24項目)、支援の必要な生徒への対応の実施状況を尋ねたQ12(10項目)の結果について、回答となる4つの選択肢を肯定的回答と否定的回答の2つに分け、肯定的回答の割合を実践前後で比較した。特別支援教育に対する意識に関わる質問については、先行研究による教員の意識との差も確認するため、国立特別支援教育総合研究所(2012)による調査結果との比較も行った。

この結果から次の3点が明らかとなった。

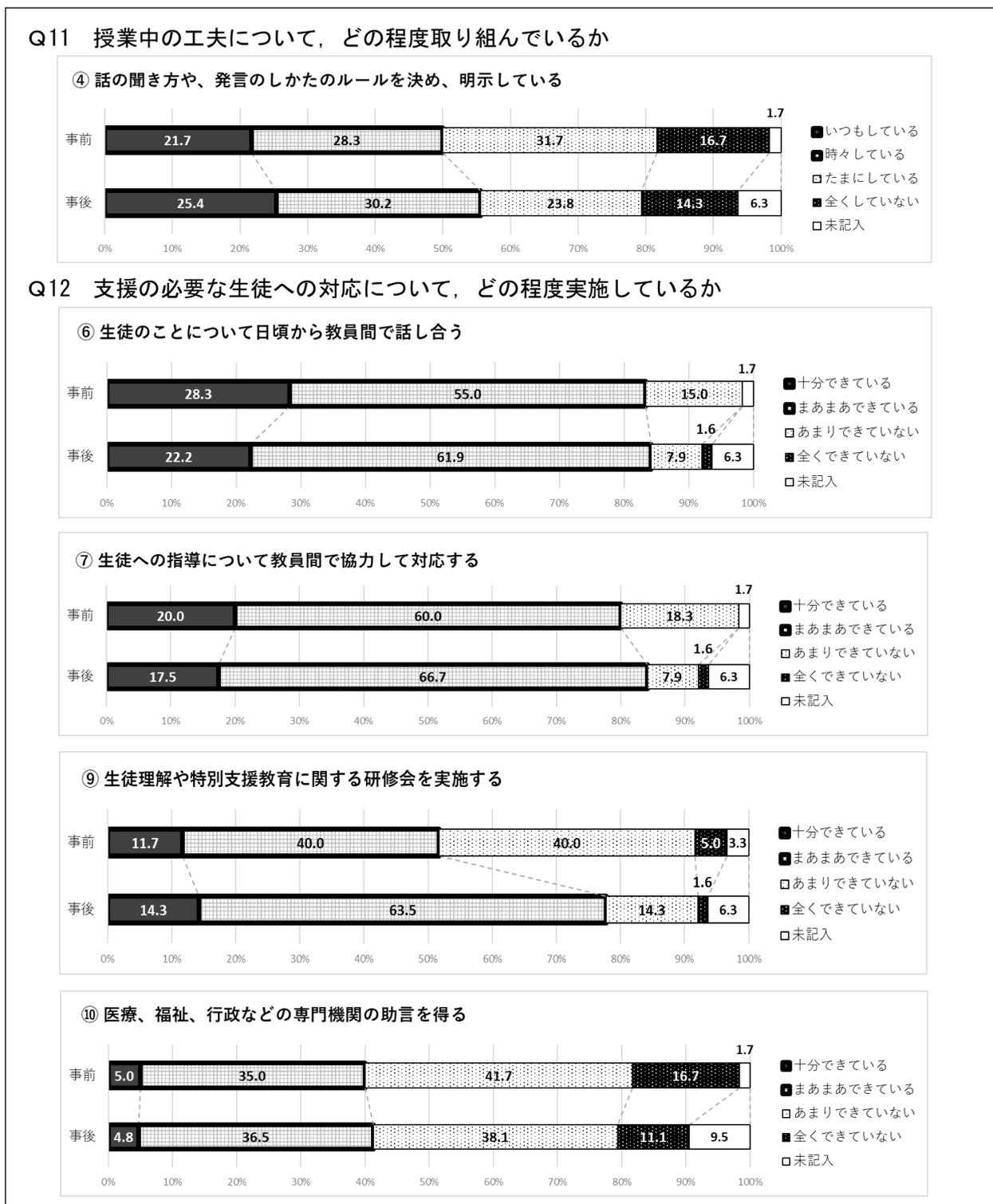
まず、Q1～Q6までの特別支援教育に対する意識は、【図8】に示すように全ての項目において国立特別支援教育総合研究所(2012)の調査時よりも肯定的回答の割合が高まっている。特に、「特別支援教育の必要性」「全職員で取り組む必要性」「気になる生徒についての相談」については100%に近い割合で肯定的な回答が得られたことから、特別支援教育に対する意識が高まっていることが読み取れた。

実践前後の比較では「Q2 支援が必要な生徒に対する支援に取り組んでいる」が、81.7%から90.3%に増加した(【図8】)。これは、研修プログラムを活用した研修会と実践を行うことで、支援に取り組んでいるという意識が今後も高まる可能性を示唆する結果であると考えられる。



【図 8】 実践前後の特別支援教育に対する教員の意識の変化及び先行研究による調査結果との比較 (事前 N=60, 事後 N=63)

各教員が指導・支援を実施しているかを尋ねる「授業中の工夫（24項目）」と「支援の必要な生徒への対応（10項目）」の項目については、34項目中、肯定的回答が減少した項目が29項目、増加した項目は5項目であった。指導・支援の実施状況については、減少している項目が多く見られた中で、増加した項目及び同じ割合を維持している項目については、実践前後の変化を示すものとして捉えることが可能である。つまり、【図9】に示す、肯定的回答の割合が増加した、Q11の「④話の聞き方や、発言のしかたのルールを決め、明示している」の1項目と、Q12の「⑥生徒のことについて日頃から教員間で話し合う」「⑦生徒への指導について教員間で協力して対応する」「⑨生徒理解や特別支援教育に関する研修会を実施する」



【図9】指導・支援の実施状況について肯定的な割合が増加した項目（事前N=60，事後N=63）

する研修会を実施する」「⑩医療、福祉、行政などの専門機関の助言を得る」の4項目については、研修の効果がある項目として捉えることができる。と考える。

これらのことから、特別支援教育に対する意識は、2011年の調査時から高まっており、プログラムを活用した研修会を実施することにより、「支援が必要な生徒に対する支援に取り組んでいる」という意識が高まる可能性が示された。これは、本研究で目指す教員の姿の「②教員が生徒の困難さに合わせた指導・支援を実践している【指導・支援】」につながる可能性を示唆するものと考えられる。また、指導・支援の実施状況については、支援の必要な生徒への対応について「教員間で話し合う」「教員間で協力して対応する」という意識が高まる可能性が示された。と考えることが可能であり、本研究で目指す教員の姿の「③校内で生徒の困難さや指導・支援の共通理解を図り、役割分担ができていく【組織的な対応・校内支援体制】」につながる可能性を示唆する結果である。と考える。

(ウ) 自由記述から

11月に実施した質問紙調査の自由記述欄に19名の教員から、意見及び感想が得られた。その中の主な意見及び感想を抜粋したものが【資料20】である。なお、網掛け部分は、著者が得られた意見及び感想を分類するために加えたものである。

指導・支援を実践する教員の意見・感想から、成果としては「プログラムを活用した校内研修会の意義」について、「教員の共通理解を図り意識統一ができること(②③)」「様々な視点から考

【資料20】教員対象の事後質問紙調査における自由記述の主な内容 (n=19, 主なものを抜粋)

自由記述
① 生徒の他教科での取り組み方や学校での様子など自分一人では分からない部分を共有し、それに 応じた支援の在り方を見付けていくという部分で非常に参考になった。 【多様な視点からの実態把握】【指導・支援を考える手立て】
② 先生方それぞれの見方や支援の仕方を共有する機会となり、全員で一貫した支援にあたることの きっかけになったと思う。3回実施したことで単発的にならず、長期的な取組になり、今後につ ながる研修であり、よかった。【教員の意識統一・共通理解】【継続した長期的な取組】
③ 今後どのように支援していったらよいかを色々な角度から考えることができ、確認し合うことが できた。これからの指導の方法がはっきり見えたことがよかったと思う。 【教員の意識統一・共通理解】【多様な視点からの支援の検討】【今後の見通しの明確さ】
④ 一人だけでは出ない意見を知ることのできる場であり、さらにはその話し合いなどの結果に対す る講評もいただけるということで、特別支援教育の充実を考えている学校、教員にとって、とて も有意義な時間だったと思う。【多様な視点からの支援の検討】【専門的な視点】
⑤ 生徒の実態把握と支援の手立てを考えるのに非常に有効な方法だと思った。ただ支援の必要な生 徒が複数名いる場合、一人一人に時間をあまりかけることは実際は難しいので、一番いいのは職 員室内でざっくばらんにあれこれ話し合えることだと思うが、これも難しそう。機会を頑張って つくっていくしかなさそう。【指導・支援を考える手立て】【検討する場の設定】
⑥ 担当の教師は大変だったと思うが、自分にとってとても充実した研修会になった。今後、個人 の対応の具体例(こういった困り感を持っている生徒にこのように対応したら生徒の困り感がなくな った等の事例)を挙げての校内研修会があると正直助かると思った。【効果的な指導・支援】
⑦ 校内では先生方とよく意見交換・情報交換をしているのでもっと専門の先生、実践している方 の話を聞きたい。「こういう場合(こういう生徒)はこのようにすると効果的な場合が多い」など 聞けるともっと自身の授業等に生かせるのではないかと思う。【効果的な指導・支援】
⑧ もっと本校の実情に合った支援のしかたを具体的に教えてほしい。【効果的な指導・支援】
⑨ 専門家の助言がもっとほしい。【専門的な視点】

えることができる場であること(③④)」「今後の見通しが明確になること(⑧)」等の全体で集まって協議することによって得られる効果のほか、「多様な視点からの実態把握や支援の検討ができる(①③④)」「指導・支援を考える手立てが分かる(①⑤)」「継続した長期的な取組ができる(②)」等、特別支援教育を進めていく流れが体験できたことが挙げられた。また、課題としては、「検討する場の設定(⑤)」や特別な支援を必要とする生徒への「効果的な指導・支援(⑥⑦⑧)」及び「専門的な視点(⑨)」の必要性が挙げられた。このことから、プログラムを活用した研修の在り方として、効果的な指導・支援に焦点を当てた具体的な内容を取り上げることや、専門家の活用も含めた研修会を検討することによってより専門的な内容に高めていくこと、研修会をどのように設定していくかを検討することが今後の課題として提起されたと考える。

#### イ 特別支援教育コーディネーター対象の質問紙調査から

研究協力校各校の特別支援教育コーディネーターに、校内研修を受けて指導・支援を継続した取組を終えて、質問紙調査を行った結果を次頁【資料21】に示す。なお、網掛け部分は、著者が得られた意見及び感想を分類するために加えたものである。

研修会を進める特別支援教育コーディネーターの意見・感想から、プログラムを活用した校内研修会の意義として、教員それぞれの見方を共有しながら【多様な視点からの実態把握】や【教員の共通理解・意識統一】が図れることのほか、共通理解を図った指導・支援を、他の困り感を抱えている生徒に応用できたとする【指導・支援の応用】が挙げられた。また、特別支援教育における具体的な指導・支援を検討する過程を体験できたこととともに、その効果を実感できたとする【支援の在り方を見付ける方法】や【支援を検討する効果】を実感できたとする意見も挙げられた。課題としては、様々な業務が重なる中で、どのように【検討する場】を設定していくかについてや、研修会を進めていく上での【専門的な視点】の必要性が挙げられた。研修会を進めていくに当たって、学校全体のものとして取り組むために、管理職からの働きかけや、校内研修会を年間計画に位置付けることなどの工夫が必要であること、また、専門家を招いて助言をもらう部分と、自分たちで進めていく部分を分けて取り組んでいくなどの工夫が、今後必要であると考えられる。

## 4 考察

実践前後の研究協力校各校の教員への調査から、研修会を実施しているという意識が高まったことは示されたが、他の項目では有意差は認められなかった。また、前述した「3. 実践・結果の分析」における研究協力校各校の研修会実施前後の教員への調査から、それぞれ研修プログラムごとに項目は異なるものの、研修の効果に関する意識の高まりが見られた。つまり、研修会を実施しているという意識は高まり、研修後にその効果を感じることはできたと捉えられるが、指導・支援の実践に対する意識には変化は認められなかった。このことについて考察する。

第1に取組期間の長さが影響している可能性が考えられる。本実践は、およそ3か月という短い期間で実施されたものであった。教員の特別支援教育に対する意識が変わり、指導・支援の実践に変化が見られるためには、「指導・支援の効果を実感する」必要があると考える。この3か月間で、実践の効果までを求めるための期間が十分ではなかった可能性がある。

A校では、9月の「事例検討会」から11月の「個別の指導計画の活用」という流れで研修を進める中で、対象生徒の変容や保護者の反応が報告され、指導・支援の効果を実感し共有できた実践となったが、参加者は支援にかかわる一部の教員に限られており、学校全体に広げるまでには至っていない。また、B校においては、「事例検討会」と「授業づくり」という2つの視点から指導・支援に迫る取組を進めた。共通理解を図ることのよさを実感したり、授業の具体的なイメージをもつことができた等という意見がある一方で、専門的な視点からの助言を求める声もあり、日々支援の必要な生徒への

## 【資料 21】 特別支援教育コーディネーター対象の質問紙調査の結果

<p><b>1 成果</b></p>	<p>◎ 対象の生徒の全体像（日常生活、学習への取り組み状況、家庭の様子など）を、関わる全職員で把握し、統一した認識のもとで支援に当たれた。 【多様な視点からの実態把握】【教員の意識統一・共通理解】</p> <p>◎ 対象の生徒だけでなく、他の困り感を抱えている生徒に対しても、同じような配慮で支援を行えた。 【指導・支援の応用】</p> <p>◎ 具体的な支援の手立てを考えるための流れを体験し、その効果を感じることができた。 【指導・支援を考える手立て】【指導・支援を検討する効果実感】</p> <p>◎ 生徒の問題に向き合うことができた。 【生徒の問題に向き合う姿勢】</p> <p>◎ チーム学校としてのまとまりができてきた。 【組織的な対応・校内支援体制】</p> <p>◎ 教師が抱えている困り感が見えてきたことにより、学校として必要なことが明確になり、学校として何ができるのかについての共通意識が持てた。 【教員の意識統一・共通理解】</p>
<p><b>2 課題</b></p>	<p>● 今回は研究協力校であるという名目で2回時間を確保出来たが、様々な業務が重なる時期に職員を招集することには少なからずためらいを感じた。実際、2回目の参加者はかなり少なくなった。校内委員会が管理職主導で立ち上がり、会議が定例化すればこのような躊躇を感じずに取り組めるのではないか。 【検討する場の設定】【管理職のリーダーシップ】</p> <p>● 今回の2度の支援会議では、いずれも最後にセンター担当者に講評をお願いして会議のまとめとなったが、この役割を担う人がいない状況で会議が成立するのか不安がある。 【専門的な視点】</p> <p>● 見通しがつくまでまとまった話し合いの時間が必要だった。もう少し気軽に短時間でできるようなでないと続かない。 【検討する場の工夫】</p> <p>● 目標の立て方、支援の方法の考え方に、特別支援教育的な感覚が必要だと思われる。 【専門的な視点】</p> <p>● 協議で煮詰まったときに、センター担当者に助言で入ってほしかった。 【専門的な視点】</p> <p>● プログラムの内容に、初級編、中級編等、選択できる幅があるとよい。 【プログラムの選択制】</p>
<p><b>3 自由記述</b></p>	<p>・当初、職員は、これらの研修を行うことで支援を要する生徒に対して、具体的な手立てをご提示頂けるものという期待が大きかったようである。研修を終えてみれば、関わる職員が自分たちで対象生徒の状況を分析して、手立てを考え取り組むという当たり前の結論に至ったが、裏を返せば特別支援教育は専門の先生から教わらなければ自分たちでは出来ないという思い込みがあるのではないかと感じた。自分自身も大変勉強になった。しかし今後も継続するためには、委員会を機能させ、学校体制として取り組んでいかなければ難しいと感じる。</p> <p>・「やり方」を体験したこの後、自校の方法として形作り、定着させることができるか重要であると思うが、いささか不安な部分でもある。</p> <p>・生徒の実態に合わせた支援について、年度初めに研修会を実施することにより、異動してきた教員の理解も深まるのではないか。</p>

対応を迫られる中で、指導・支援の効果を実感できるまでには至っていないと考えられる。さらにC校においては、実態把握を中心とした事例検討会から個別の指導計画の作成という流れで進めたが、3回目の研修会では、新たな課題を発見して指導・支援を再度検討しており、2回目の研修会で共通理解を図った指導・支援の効果を実感するというよりは、見えにくい生徒の実態を深める内容であったと言える。そのため、指導・支援の効果を確認する部分も見られたが、次の課題に対する新たな指導・支援を確認する場となり、互いの指導・支援の効果を確認するまでは至らなかったと考える。

これら3校の実践内容を整理すると、各教員が「研修の効果を実感」してから「実践の効果を実感」するまでには、「指導・支援を試行錯誤する」という段階があり、その「試行錯誤する段階を学校体制の中でどのようにサポートしていくか」という点が重要であると考えられる。教員が指導・支援のイメージを具体的にもって実践する中で、生徒の変容が見えてくると効果を感じることができるが、特別な支援を必要とする生徒の場合、高等学校段階になると様々な要因が複雑に絡み合っている場合もあり、実態がつかみにくい状況が考えられる。教員に生徒の変容が見えず、この指導・支援でよいのだろうかと不安や迷いが生じたときに、専門的な視点からの助言を受けたり、同僚と情報共有をしながら生徒の変容や指導・支援の方法を確認したりしていく。このような指導・支援の方向性を確認する場をもつことは、個別性の高い教育的ニーズに応じる特別支援教育を進めていく上で必要なことと考える。研修会ごとの教員への質問紙調査の結果から、情報を共有したり、今後の支援の在り方について共通理解を図ったりすることのよさを実感する意見が挙げられたことから、定期的な研修会や支援会議を継続して実施することは必須のことと考える。

第2に取組の対象を絞り切れなかったことによる影響が考えられる。特別支援教育は、生徒の教育的ニーズに応じて行うものであり、生徒個々の様々な実態における教育的ニーズはそれぞれ異なるものである。対象を絞って実践したことにより、A校のように短期間で効果が実感できる場合もあるが、C校のように生徒一人の実態把握に時間を要する場合も考えられる。また、B校が実践した授業づくりという全体への指導・支援は、その指導・支援によって変容を実感できる生徒もいればできない生徒もいると思われる。各教科の学習内容によっても生徒の実態が異なっているため、教員の意識がどの生徒に向けられているのかが異なり、把握している対象が絞りきれない状況があったと思われる。得た知識を実践に活用できるものとするためには、指導・支援を実践してその効果を実感することが必要であり、個別性の高い特別支援教育においては、「全体への指導・支援」を継続しつつ、「個への指導・支援」をいかに進めて効果を実感できるものとしていくかが重要であると考えられる。本研究のプログラムとしても取り上げられている「個別の指導計画の作成」及び「個別の指導計画の活用」が、特別な支援を必要とする生徒に義務付けられているのは、「個への指導・支援」を効果のあるものとして高めていくために必要なものであるからということが確認できたと考えられる。

第3に取組時期の問題が考えられる。本実践の時期は、2学期に入ってから9～11月までの3か月間であった。国立特別支援教育総合研究所(2014)から示されている7つの観点のうち、本研究では3観点到って進めてきたが、その7つの観点の1つに「中高連携」が含まれている。特別な支援を必要とする生徒の情報を中学校から引き継ぎ、年度初めからの支援を共通理解して進めていく場合の方が、年度途中の課題が明らかになってから指導・支援を始めていく場合よりも、不適応になる割合も少なく、指導・支援の効果をより実感できると考える。中学校からの情報をどのように引き継いで実態把握を行い、4月からの指導・支援の共通理解につなげていくかが、1つのポイントになると考える。

次に、実践後の教員への調査における自由記述と特別支援教育コーディネーターへの調査から、研修の効果を実感する意見や、検討する場の設定の問題、専門的な視点を求める意見が得られたことについて考察する。

今回各校で活用した授業づくり以外の各プログラムは、特別支援教育を進めていく過程である「実態把握」と「指導・支援」のPDCAサイクルを確認するものであった。【多様な視点からの実態把握】【多様な視点からの支援の検討】【指導・支援を考える手立て】【今後の見通しの明確さ】の視点からの意見は、プログラムの中で検討する内容を明確にして協議する場を設定したことから得られたものと考えられる。これらの意見は、専門家を招いての講義のみの研修会では、各教員が自分の指導・支援の見通しを立てることはできても、それを全体のものとして確認したり協議したりすることがなけれ

ば得られない視点であり、「組織的な対応・校内支援体制」につながる取組であったと考える。また、【指導・支援の効果実感】【継続した長期的な取組】の視点からの意見は、1回限りの研修会ではなく、研修会を継続した実践であったことによる成果であると考え。研修会で共通理解を図ったことを実践し、その結果を確認する場を設定したことにより、日常的には共有されないままに経過していく情報が共有され、効果を実感できたものとする。

また、【検討する場の設定】の視点からの意見は、検討する場の必要性を感じながらも、様々な業務が重なっている状況で研修会の設定が難しい状況があることの表れであり、【効果的な指導・支援】【専門的な視点】からの意見からは、自校による取組だけでは解決が難しい状況があると考えられた。これらの課題を解決するためには次のような手立てが考えられる。

【検討する場の設定】については、全体の研修会は必要と考えるが、学校の状況に応じて、A校のような支援に関わる教員のみで実施する支援会議のような形式も取り入れ、全体研修会と支援会議を組み合わせて実施することが考えられる。【効果的な指導・支援】【専門的な視点】については、「実態把握」と「指導・支援」を検討するサイクルを学校の年間計画に位置付けた上で、専門家を活用した研修をどこに入れて実施するかの見通しをもつとともに、日常的に相談できる専門機関や専門家とつながっておくことで解決につながるものとする。

## Ⅷ 研究のまとめ

本研究は、高等学校における特別支援教育の推進のために必要な校内研修プログラムを作成し、それを活用した研修及び生徒への指導・支援の実践を通して、校内における特別支援教育の推進の在り方を明らかにすることを目標とするものであった。目指す教員の姿を3つの観点から「①教員が生徒の困難さに気付くことができている」「②教員が生徒の困難さに合わせた指導・支援を実践している」「③校内で生徒の困難さや指導・支援の共通理解を図り、役割分担ができている」と捉え、「校内研修プログラムの作成」「各校のニーズの把握」「研修プログラムの活用及び指導・支援の実践」の3つの手立てによって研究を進めてきた。以下、全体考察及び研究の成果と課題について示す。

### 1 全体考察

#### (1) 教員の目指す姿への変容について

前項の「Ⅶ 実践・結果の考察」から、目指す姿に向けて教員に次のような変容が見られた。  
＜全体の変容＞

- ・各校のニーズに応じた研修プログラムを活用した研修会を実施することによって、研修プログラムごとに研修前後で教員の意識に変化が見られたり、研修の効果を実感する回答が得られたりした。
- ・研修会後の「指導・支援」の実践後は、実践前と比較して「支援の必要な生徒への支援に取り組んでいる」という項目や、支援の必要な生徒への対応について「教員間で話し合う」「教員間で協力して対応する」の項目において、肯定的回答の割合が増加した。

＜一部の教員の変容＞

- ・多様な視点からの実態把握や支援の検討が行われ、今後の支援の共通理解を図り、見通しをもって支援に当たることができるようになった。
- ・2回目の検討会では話し合うべき内容が焦点化され、活発な意見交流がなされた。
- ・指導・支援の効果を実感することや、指導・支援の修正を図ることができた。
- ・特別支援教育の実態把握及び指導・支援の考え方が分かり、他の生徒への応用も可能となった。

## (2) 研究の手立ての有効性について

### ア 研修プログラムの作成

先行研究等から高等学校における特別支援教育の現状と課題を明確にした上で、先行研究を基にプログラムを作成した。留意点として示した「実際に体験しながら学べる内容」「少人数による協議の場が設定されるものであること」の2点については、体験や協議の場があったことに対する教員の意見が得られたことから有効であったと考える。特に、プログラムの内容が特別支援教育を進めていく過程である「実態把握」から「指導・支援」までのPDCAサイクルを確認するものであったことから、特別支援教育の進め方を体験的に学ぶことができたと考えられる。

しかし、「専門性がなくても取り組みやすいもの」「自校で研修できるもの」の2点については、教員からの【専門的な視点】を求める意見や、特別支援教育コーディネーターから一人で進めることへの不安等の意見が挙げられたため、今後、専門家を活用する視点を加えることや、進行シナリオを加える等の工夫が必要であると考えられる。

### イ ニーズの把握

研究協力校各校に、教員への質問紙調査と特別支援教育コーディネーターへのインタビューを行い、各校のニーズを把握した。各校の研修内容を決定する上で重要なものであると考えるが、この有効性についての確認までには至らなかった。

国立特別支援教育総合研究所(2012)の分類によれば、本研究のA校とB校はⅡ群に、C校はⅢ群に分類される。しかし、A校とB校は同じⅡ群ではあるが、学校規模や困難さを抱える生徒の割合が異なっており、研修の進め方や内容も異なってくる可能性が示唆されたと考えられる。つまり、今回ニーズを把握するために調査した、特別な支援を必要とする生徒の割合や、学校規模、特別支援教育に対する教員の意識、特別支援教育コーディネーターの考え等から、研修内容を決定するために必要な要素が見えてきたと考える。今後、研修を計画していくに当たり、Ⅰ～Ⅲ群の分類を参考にしながら、さらに研修プログラムを選択するために必要なポイントを示すことが可能になると考える。

### ウ 各校のニーズに応じた活用と指導・支援の実践

各校のニーズに応じて研修プログラムを選択し、指導・支援の実践との関連をもたせながら研修会を継続して実施した。これにより、前項で述べた【指導・支援の効果実感】【継続した長期的な取組】の視点からの意見が得られたと考える。講義によって得られた知識だけでは理解が深まらなかったものが、研修プログラムに示された枠組みで、各教員が実践した内容や生徒の反応を共有し協議することにより、活用できる知識となり、理解が深まったものと考えられる。

また、事例検討会(個別指導計画の作成、個別の指導計画の活用含む)としての研修会を設定したことにより、一部の生徒に限られてはいるものの、生徒の困難さや指導・支援の共通理解を図る場をもつことができ、【多様な視点からの実態把握】【多様な視点からの支援の検討】【指導・支援を考える手立て】【今後の見通しの明確さ】等の視点からの意見につながったものと考えられる。

## 2 研究の成果

本研究の成果として、次の5点を挙げる。

- ・校内研修プログラムを作成することにより、特別支援教育を進めていく過程のPDCAサイクルを示すことができ、体験的に学ぶことができる内容を確認できた。
- ・事例検討会を継続して実施することにより、多様な視点からの実態把握や指導・支援の検討が行

われ、今後の支援の共通理解を図り、見通しをもって支援に当たることができるようになった。

- ・各教員がやるべきことを明確にして実践に入ることにより、2回目の検討会で話し合うべき内容が焦点化され、活発な意見交流がなされた。
- ・研修会を継続して実施したことにより、一部の学校において、指導・支援の効果を実感することや、指導・支援の修正を図る取組につながった。
- ・知識を得る講義形式の研修会ではなく、自分たちの情報を出し合って支援を検討していく過程を体験したことにより、特別支援教育の実態把握及び指導・支援の考え方が分かり、他の生徒への応用も可能となった。

### 3 今後の課題

本研究では、校内研修プログラムを活用した研修会と指導・支援の実践を一定期間実施することを通して、特別支援教育の推進を図ろうとするものであった。本研究の課題として、教員が指導・支援の効果を実感するための工夫と特別支援教育コーディネーターが研修会を進めやすくする工夫が挙げられる。

これら2つの課題を改善するために、今後どのようなことに気を付けて実践を進めていけばよいか、以下に述べる。

#### (1) 教員が指導・支援の効果を実感するための工夫

- ・「実態把握」と「指導・支援」を検討するサイクルを意識した研修会や支援会議等の実施年間計画に位置付け、年度初めから見通しをもって、定期的の実施していくこと
- ・中学校からの情報を引き継ぎ、年度初めに生徒の状況の共通理解を図ること
- ・校内の教員で進める研修と、専門家を活用する研修を分けて計画を立てること
- ・指導・支援が明確にならない状況では、研修会における専門家の活用や、日常的に相談できる専門機関や専門家とつながりをもって活用できるようにしておくこと
- ・全体での研修会の実施が難しい場合は、指導・支援に関わる教員による支援会議を計画し、月予定表等にあらかじめ入れて共通理解を図っておくこと

#### (2) 特別支援教育コーディネーターが研修会を進めやすくするための工夫

- ・進行シナリオや活用できるコンテンツ等を研修プログラムに示すこと
- ・専門家と協働で研修会を実施すること
- ・研修会を年間計画に位置付け、実施の見通しを明確にしておくこと
- ・年間の研修計画について、各校のニーズに合わせたプログラムの活用のパターンの例を示すこと

## Ⅸ 引用文献

### 【引用文献】

- 青森県総合学校教育センター (2016), 『校内研修活性化のためのアイデアブック』
- 岡山県総合教育センター (2013), 『高等学校における特別支援教育の観点からの指導・支援に関する研究』, 研究紀要, 7
- 韓 昌完・沼館 知里・呉屋 光・照屋 晴奈 (2018), 『切れ目のないキャリア教育のための評価尺度 (Scale for Coordinate Contiguous Career; Scale C<sup>3</sup>) の開発』, *Journal of Inclusive Education*, 4, 1-20.doi: 10.20744/inclleedu.4.0\_1
- 国立特別支援教育総合研究所 (2014), 『高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への指導・支援に関する研究—授業を中心とした指導・支援の在り方—』 研究成果報告書
- 国立特別支援教育総合研究所 (2012), 『発達障害のある子どもへの学校教育における支援の在り方に関する実践的研究—幼児教育～後期中等教育への支援の連続性—』 研究成果報告書
- 式部 陽子・岩坂 英巳・井上 雅彦 (2015), 『高等学校定時制課程における行動面・学習面で「気になる」生徒の支援に関する教員へのコンサルテーションの効果の検討』, 次世代教員養成センター研究紀要, 1, 75-81
- 静岡県総合教育センター (2008), 『校内研修の活性化に関する研究 一人一人の教員が主体的に取り組む校内研修の在り方—合意形成を図るためのコミュニケーションを活用する研修の工夫—』
- 高橋 あつ子 (2007), 『一から始める特別支援教育「校内研修」ハンドブック』, 明示図書出版
- 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会 (2016), 『初等中等教育分科会高等学校教育部会審議会まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～ (平成 26 年 6 月)』, pp.5-6
- 特別支援教育の推進に関する調査協力者会議 高等学校ワーキング・グループ (2009), 『高等学校における特別支援教育の推進について 高等学校ワーキング・グループ報告』
- 姫野 完治・関 あゆみ・安達 潤・近藤 健一郎 (2017), 『高等学校における特別支援教育の現状と課題(2) : 現職教師と教職課程履修学生への意識調査から』, 子ども発達臨床研究, 9, 23-33
- 北海道教育委員会 (2015), 『発達障がいのある子どもの指導や支援に関する基礎的な知識や技能を習得するための校内研修プログラム～「体制づくり」から「指導や支援の充実」へ～』
- Mitsuyo SHIMOJO, Haruna TERUYA, Aiko KOHARA (2019), 『Verification of Reliability of The Scale C3 (Scale for Coordinate Contiguous Career) and Characteristics between Evaluators: Focusing on Data in High School in Okinawa Prefecture』 Proceedings of International Conference on Next-generation Convergence Technology[ICNCT2019], 397
- 文部科学省 (2018), 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』, 平成 28 年 12 月 21 日, 中央教育審議会, p.8, p.58

### 【引用 Web ページ】

- 文部科学省 (2017), 『平成 29 年度特別支援教育体制整備状況調査結果について』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/icsFiles/afieldfile/.2108/06/25/1402845\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/icsFiles/afieldfile/.2108/06/25/1402845_02.pdf)  
(平成 30 年 5 月 22 日閲覧)
- 文部科学省 (2012), 『特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo3/siryo/attach/1325892.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo3/siryo/attach/1325892.htm)  
(平成 30 年 3 月 9 日閲覧)

### <おわりに>

本研究を進めるに当たり, ご協力くださいました研究協力校の先生方, 生徒のみなさんに心からお礼を申し上げます。また, 実践を進めるに当たり, 研修を計画し実践に導いてくださった研究協力校の特別支援教育コーディネーターの先生方に感謝申し上げます。

